

対の情理 影の愉楽 (1)

夏

剛

「衣食住」と「衣食住行」——「異同」の異・同——「三大」と「四大」——奇数好みと偶数好み——「吉祥／開運数」の6・8と7——言霊思想と「数霊信仰」

衣・食・住・行（交通・旅行等の移動）に関する生活風景から、日本と中国の文化・社会・国民性等の様々な異同が見て取れる。不一致と一致の両義を持つ「異同」は、日本語では転じて相異を表すが、中国語では相違点と共通点の両方を言う。同じ単語の意味には、両言語の異・同の両面が現れる。日本語の「衣食住」と中国語の「衣食住行」は1字の差に於いて、共に漢字を使う双方の微妙で且つ本質的な隔たりを現している。2つの類似の熟語は「衣食住」を共有しながら、日本的な奇数好みと中国的な偶数好みの違いを先ず感じさせる。

日本語には「日本三大河川／温泉／祭」や「世界三大美人／料理／夜景」等々、3で最上級の代表格を挙げる言い方が多い。同じ5本の指に入る程の傑出した存在の纏め方として、中国では自国の「四大発明／名園／菜系（料理系統）」「初唐四傑」「楷書四大家」の様に4が目立つ。「古代四大美人」の内に西施（春秋時代）・王昭君（前漢）と楊貴妃（唐代）との間の貂蟬は、古典文学「四大名著（異称“～奇書”）」中の『三国志演義』（〔明〕羅貫中著長篇小説）の虚構の人物である。穿った見方をすれば、実在の3者を4名とする為に加えられたのかも知れない。

山東・江蘇・広東・四川を全国の頂点とする四大料理は、倍数の「中華八大（+浙江・安徽・福建・湖南）菜系」の精選版である。他の地域の自負と不服から異論が続出し、8以上は同じ偶数の10, 12, 14, 16（例= +北京・上海／陝西・河南／湖南・遼寧／天津・雲南）等の諸説に次いで、1級行政区（省・自治区・中央直轄市・特別行政区、日本の都道府県や米国の州に相当）と同数の34の新説も提起された。切りの良い「十大」と共に一定の市民権を持つ「十六大」は、4の2乗（2の4乗）につき順当な上限と為る。

偶数を好む中国人の拘りは「吉祥数」（幸運の数）^{ラッキー・ナンバー}に見られ、電話番号の6と8の多重ぞろ目は「天価」（天文学的数字の高値）で取引される。2017年に広西の行商人が所持した8の

7つ続く番号は司法競売で391万元（6千万円弱）で落札され、20年に中国電信発行の末尾が88888の番号はインターネット上589人参戦の競売（8.15～16）で、開始時の2千元（1元≒15.6円）が5051回の価格更新の末225万まで吊り上げられた。高い社会的地位を象徴する所有物として法外な大金で求める風潮は、好い縁起の価値を認める「開運数」信仰を端的に現した。

2つの数字は「六」（liù）と「禄」（lù）、「八」（bā）と「発」（fā）の発音の近似から、「俸禄・福祿」「発展・発達・発財（財成）」の御利益を含むとして貴ばれる。携帯番号の11桁より数字が少ない自動車登録番号でも、「一路発」（両言語共通の「一路平安」[道中ご無事であるよう]）に因み、「発財」街道を薦進する意の168（「路」は「禄」と同音）、同義の「発一路」（儲け捲り）の816、「発一発」（一儲けしよう）の818、「我要発」（私は金儲けしたい）の518（「我要」[wǒ yào] → 「五一」[wǔ yī]）等、縁起担ぎの語呂合せ（中国語＝「諧音」）の番号が高く買われる。

日本でも8は漢字の形に由って好まれ、元女流将棋棋士の芸能人竹俣紅は写真集『夜明け前、紅です。』（2020）の自己採点で、末広がり縁起の良い8が好きだから888点にすると言った。対して音・意から来た中国の「吉祥数」は、言霊（言葉に宿る霊威）の霊験力を秘めた「数霊」と呼べよう。米国発の「ラッキー・セブン」（野球試合の9回中7回目の攻撃。得点の機会が多い幸運の回）の影響も有るのか、日本では一般的な意味の「幸運の7」の観念が広がっているが、中国の両「吉祥数」は日本の7・8の奇・偶半々と違って共に偶数である。

六輝の縁起と吉凶の選日——「全福人」と「単身節」——「一番」と「一級棒」——「成家・立業」——配偶の「成双成対」

日本人は結婚の日に関して大安を選び凶滅を避け、「死」と同音の4も忌まれる。「良い夫婦の日」（11.22）の偶数日も有力な選択肢に入るが、単数日を敬遠する向きは余り無い。六輝（暦注上の先勝・友引・先負・凶滅・大安・赤口）は、中国の時刻・日の吉凶占いが室町時代に伝来し変化した物であるが、共産党治下の発祥国では迷信として廃れた。日本の陰陽道で言う「黄道吉日」（何事を為すにも吉い日）も、早期の用例（曲亭馬琴『読本・椿説弓張月 [1807-11]』）より元代に出た中国語が先であるが、中国では国語辞書に残っているものの死語化した。

昨今の中国人は成婚日を選ぶ際に、随一や発足の意を含む1を除いて、偶数日にする慣習が定着しており、西暦・陰暦の両方の偶数日を追求する人も少なくない。中国の婚礼は迷信を打破する志向が支配的と為った当代にも、「全福人」（父母・配偶者・子女が全て健在の人、多く婦人に就いて言う）に仕切りを願う仕来りは余り変っていない。近年来流行りの「光棍/単身節」（独身の日）の「11.11」の様に、1はNo.1の優位を思わせる半面、「孤単」（1人切りで寂しい）のイメージを帯び、No（否）の不評にも繋がり易い。

同類中の最高や最大を表す日本語の「一番」は近年、中国で音訳兼意識の新語「一級棒」

(yijiibàng) を生み、第一級の「棒」(形容詞、立派の意)を字面に映す処が妙味である。中国のインターネット通信販売の最大商機と為る安売り催事の旧称は、「單身漢」(独身の男)と同義の「光棍」を用いたが、名詞の「棒」と対を為す「棍」は此処で孤立の感が強い。俗に独身の男を言う日本語の「総角」は、起源の朝鮮で成年の未婚男子の蔑称であった。「光棍」も「光棍」(無頼漢)と通じて、光輝ならぬ「光」(丸裸。素寒貧)の響きがある。

独身男性を半人前に扱うのは最早時代遅れであるが、所帯持ちや「全福人」と照らし合せば、偏見の根底の「単=不完全」の固定観念に突き当たる。儒教の始祖孔子(春秋時代の思想家・教育家)の「三十而立」(30にして立つ)は独立の場を持つ意であるが、多くの現代人の30歳頃の「成家立業」(家庭を持ち[経済的に]自立する)と妙に符合する。「成家」は両言語共通の「配偶」(添え合せる事。夫婦)の結合で、偶数の名称にも有る「偶」(「対に成る」[2で割り切れる])は、中国語の「成双成対」(双を成し対を成す)と通じる。

「一番」と「一番」——初めに番・2人組有りき——五行の相生・相剋——
陰陽の対立・統合——陰の隠れた優位と黄金信仰

日本の漢単語「一番」は初出(律令施行細則『延喜式』, 927)に於いて、「(2人又はそれ以上が成る)1組。一番」「最初。先頭」の両義であった。両言語共通の1回の試み/行為/作用は和製語義も交じり(特に歌舞等の1曲, 囲碁・将棋等の1局, 相撲の1勝負), 「1度/最も」の意は名詞・副詞の両方に持たれる。和語「番」は両者1組(の結成), 動物の雄・雌の1対, 夫婦等を表し, 「番う」(「継ぎ合う」意)の多義(「2つのものが組み合う。対に為る」「雌雄が交尾する」等)と合せて, 「一番」の「初めに番・2人組有りき」(造語)の語義誕生は示唆に富む。

「初めに言有りき。言は神と共に在り, 言は神也き。」基督教の経典『新約聖書』のこの名言(『ヨハネ福音書』第1章)は, 万物の生成に対する神の言の始原的な働きを説く。希臘語のlogosは原義の「(人々が話す)言葉」から, 概念・論理・理由・理論・思想や言語・理性・理法の意を派生し, 基督教では神の言(三位一体の第2の位格に当る子なる神)を指す。『旧約聖書』の天地創造の神話(『創世記』第1章)は, 神が発した「光あれ」に由って地や水を覆う闇から光が現れたと言うが, 暗黒→光明の転換は正に「陰陽」の語順に合致する。

陰陽道(天文・暦数・卜筮[吉凶・運勢の占い]・卜地[土地選びの風水判断]等を扱う方術)は, 名称も理念も中国の陰陽五行説を基にした。元祖の五行哲理は万物組成の元素として, 天地間に流動・循環を繰り返す5つの気(木・火・土・金・水)を挙げた。5元素相生(木から火を, 火から土を, 土から金を, 金から水を, 水から木を生じる)の起点は, 木の摩擦熱で火を得て形成・発展を遂げた人類の発端に重なる。相生と相剋(木は土に, 土は水に, 水は火に, 火は金に, 金は木に剋つ)は対立・統一を為し, 不易の原理と変化の流転で万物の歴史を織り成す, とされた。

日常生活に不可欠な5種の物質に見立てた五行説は、人間本位の基軸から男女の性に配し、相生の同士が結合すれば和睦・幸福に為り、相剋の両者が相対すれば不和・不幸に陥る、と決め付けたが、配偶の相性は確かに好調・不調に影響する。相反の性質を持ちその消長で万物を化成する陽・陰2極は、日月・昼夜・春秋・南北・雌雄・男女や明暗・動静・強弱・盛衰等の色々な対に見える。五行内の土は中間に在り、木・火と金・水はそれぞれ陽と陰に属する。自然万象の変異・災祥も人間万事の禍福・吉凶も、二気・五行の絡み合いで説明された。

二気に分れた2組は各相生関係おのおのに在り、陰の両者は陽の両者に剋つ。下剋上なぞらに擬えて「陰剋陽」と名付けられようが、陰の隠れた優位はこの構図からも認識し得る。五行の順は中国では金・木・水・火・土が普通で、木・火・土・金・水（陽・陽・中・陰・陰）と通じる2極バランスの均衡（陰・陽・陰・陽・中）と共に、金を貴ぶ序列に黄金信仰も垣間見える。金・水の冷涼と木・火の温暖で属性は合点が行くが、相剋に限らず金は貴金属の様に価値が木の比でなく、水は「活」の部首が示す通り生存上の重要度が火を上回る。

「開門七件事」——「柴米油塩」と「金木水火」——「加油」と「燃費」—— 「命有っての物種」と「留得青山在，不怕没柴烧」

中国の「開門七件事」（朝門を開ける時 [1日の暮しの始め] の7つの必需品）は、飲食を保障する「柴米油塩醬醋茶」（薪・米・油・塩・味噌・酢・茶）である。口の言語表現の機能に言う和製熟語「開口一番」（口を開くや先ず初めに。話を始めるや呑や）もじを振って、口食物摂取の機能と関る7要件を「開門一番」とも表せるが、筆頭は五行の最初の木→火の相生に他ならない。2番目の米は五行中の陰・陽2極間の土の産物で、人類の生存の拠り所と食糧の産地が中央に在るのは、土に根が付く木や地下に埋蔵した金かしらを頭とする発想に通じる。

第3の油は薪に次ぐ燃料と言え、決意や応援を表す「加油」（頑張る/れ）の給油の意は、熱量・栄養を補充する食事に通じる。五行中の水は火・油とも相容れない半面、味噌・酢の材料や茶を淹れる湯（中国語＝「開 [沸騰した] 水」）として欠かせない。次の塩の重要性は英語の salaryサラリー（俸給。給料）の語源（塩 [sal] に関する→ [古代羅馬で支給された] 兵士の塩購入代金）でも分るが、同義の中国語の内「薪水/金」は木・火+水/金に跨る。粗食を形容する「缺油少塩」（油を欠き塩が少ない）でも油は塩の前に出るが、脂っ濃さが目立つ中華料理の特徴に似合う。

日本の七つの道具（武士が戦陣に携えた具足・刀・太刀・弓・矢・母衣・兜、女性が携帯する鋏・小刀ナイフ・針・耳搔き・毛抜き・糸巻き・爪切り1式等）より、「開門七件事」は恒常性・緊急性が高い。「柴米油塩」は広く日常生活の必需品を指す熟語と為り、加味品の「醬醋茶」は依存度の差で最重要の部類に入らないが、3点を除く4字熟語は又もや偶数好みの現れである。元代に定着した7点1式の祖形は宋代の「柴米油塩酒醬醋茶」（酒は非必需につき後に除外）で、

薪・米と油・塩の2対の次に飲物の酒・茶が調味料の醤油・醋の対を内包する形が面白い。

油・塩も無い粗食を作るのに必須の燃料・食糧は、単語の合成で「不当家不知柴米之貴」(家事の切り盛りをしないと生活必需品の値段が分らない)と言う様に、不可欠さが周知されている。この成句は salary の由来である塩購入代金や、「薪水」(同義の「工資」は「工作」[仕事]の報酬を成す資金と解せる)と共に、生活を保つ命脈として金(金銭)を浮彫うきぼりにする。中国人は「飯」の字形から食が無いと民が造反する寓意を読み取るが、「炊」の「火+欠」は「貧血病」を振った和製漢語「金欠病」と結び付ければ、火を欠くと炊事できないとも解釈し得る。

日本の泡沫経済期に女性が求める結婚相手の条件として、「3高」(高学歴・高収入・高身長)が好く言われた。社会の発展が約30年遅行する中国では、同じ高望みは今も猶根強い。日本が世界第3位の経済大国に後退した1年後(2012)、代替ポイントの要項として「3平」(平均的な収入・平凡な外見・平穏な性格)、「4低」(低姿勢・低依存・低危険性・低燃費)が浮上した。その後、「3強」(生活・健康面が強い、不況に強い)、「3温」(優しさ・愛情・安心感が有る)、「3生」(生存力・生活力・生産力)、「3共」(金銭感覚の共通・家事育児の共有・価値観の共感)も踊り出た。

日本人好みの3点1組が多い要望は大きな転変を遂げて来たが、唯一の4項1式の最後の「低燃費」(無駄使いをしない)は、火に剋たれる金が貨幣で火(燃料)を生む力を思わせる。日本語の「命有つての物種」「命は物種」に当る中国語は、「留得青山在、不怕没柴烧」(青い山を残して置けば、焚く薪が切れる恐れは無い)と言う。食材・調味料・嗜好品より高い燃料の優先度は体温を保つ機能も要因であるが、究極の必需品の「柴」は両言語共通の「薪」よりも、木の発火の効用を字形で直観させる。

七曜の五行・陰陽——単語構成の価値順と声調順——「太初有道」——「衆妙之門」——「一生二，二生三，三生万物」——「万物負陰而抱陽」

中国に起源を持ち日本で死語化した「七曜」(火・水・木・金・土5星+日・月)の配当で、日本の1週7日制(1876年に公務に採用)は日/月/火/水/木/金/土曜と称し、中国語の「星期(星・日月の周回周期の意)日(天)/一~六」と違って、目に見える惑星を五行に対応させた古代中国の発想よりも五行を前面に出す(中国の週7日制は1902年に教育界で現れ、「星期」の初出は07年)。陽・陰・陽・陰・陽・陰・中の順と為る七曜は日に始まるが、両言語共通の「日月」と逆の和語「月日」の語順の様な、月(1年の1/12)が日を内包する時間単位に引っ掛る。

両言語共通の「大小・多少・長短・高低・上下・優劣・勝敗・真偽・善悪」等は、尊ばれる方が前が出る。逆の「軽重・緩急・禍福」等も有るが、価値判断で順当な前者の方が多い。「男女・父母・夫婦」「日月・光陰」等の語順も、男/陽尊・女/陰卑の観念を窺わせる。其故に動物の性別を表す「雌雄」や哲理キーワードの鍵詞を為す「陰陽」は、反対の序列が目を引く。

此等の言葉は由来と為る中国語で声調順に合う例が多く、「多少・長短・深淺・濃淡・明暗・新旧・真偽・優劣・強弱・長幼・男女・夫婦・兒女・兄弟・姉妹」等、枚挙に暇が無い。

同声調の「高低・上下・勝敗・尊卑・貴賤・善惡・美醜・母子・夫妻・子女」等、逆順の「大小・父母・父子」等も、「輕重(声調順)/緩急・禍福(逆順)」と違って通常の価値順位と為る。中国語の創造者は価値順位と声調順の一致を意識したのかも知れないが、最後の第4声に関らぬ「父」の絶対的な優位を考えると、声調順と雖も「雌雄・陰陽」に引っ掛る。両言語の「(一) 決雌雄」「雌雄を決する」は、戦って勝敗・優劣を決める意である。勝者は英雄と成り敗者は雌伏(「雄飛」の反対語)に甘んじる立場なのに、「雄」は「雌」の後に置く。

『聖書』の「初めに言有りき」の漢訳の傑作は「太初有道」で、「道」は動/名詞の「言う/道理」の意で、logosの「神の言」「世界を支配する理法」の両義に当て嵌る。教祖(春秋時代の思想家李耳)の通称を冠する道家の經典『老子(道德經)』の冒頭に、「道可道, 非常道; 名可名, 非常名。」(道の道とす可きは、常の道に非ず。名の名づく可きは、常の名に非ず), と道の道理を道(みち)う。第1章の結びで「玄之又玄, 衆妙之門。」(玄之又玄, 衆妙の門)と銘打った深奥な高説も、森羅万象の対立・統合を昇華させた自然無為の主張である。

「道・名」「常・非常」の対を軸とする命題に続いて、「無名天地之始; 有名万物之母。」(名無きは天地の始め, 名有るは万物の母)は、「無・有」「天地・万物」「始・母」の対を展開する。第42章の「道生一, 一生二, 二生三, 三生万物」(道は一を生じ, 一は二を生じ, 二は三を生じ, 三は万物を生ず)は、無→有の創出, 単数→複数・多数・無限への増長を描く。次の「万物負陰而抱陽, 沖氣以為和。」(万物は陰を負い陽を抱き, 沖たる気は以て和を為す)は、陰・陽の順で万物が背中合せに抱えた両側面を提示し、その中和に由る調和の理想を唱える。

「一生二, 二生三, 三生万物」は単身→配偶→子女→後世の結合・連綿を連想させ、「万物之母」「万物負陰」は「母・陰」の先導的な地位を認識させる。万物を生む3は、基督教の三位一体(創造主としての父なる神, 贖罪者基督として世に現れた子なる神, 信仰経験に顕示された聖靈なる神が, 唯一なる神の3つの位格に当るとする説)と繋がる。3者に優劣の差別が無い三位一体は日中共通の4字熟語として、3つの要素が互いに結び付き本質的に同じである事や、3者が協力して一体と為る事に言う。

3の安定感・調和——三位一体・「3種の神器」の神秘性——3点1組の節奏・ 節度の妙——「三密」と「五味雜陳」——七味/色唐辛子と「四色点心」

井上ひさし(小説家・劇作家)は『井上ひさしの日本語相談』(1995)で、「四大美人」とは何故言わないのかという読者の疑問に対して、同類のものを3つ並べると見事な安定感が得られると解説した。3は初・中・終を表すから完璧な調和の数である、という希臘の哲

学者ピュタゴラスの論断を引いた上で、3は三脚の様に構造体を作り得る数なのだと述べた。更に基督教の三位一体の玄義や死後の三大世界（地獄・煉獄・天国）、日本の三種の神器を引き合いに出して、3は宗教者には神秘を感じさせるのかも知れないと推測した。

次に米国で言う勤め人の3悪の「3A」(Accident [事故], Absenteeism [欠勤], Alcoholism [酒精中毒])等を例に、話を3に絞るのは何も日本人の特許ではないらしいと見た。確かに日本の「3K」(〔労働環境・仕事内容の〕きつい・汚い・危険)は、英語の「3D」(Dirty, dangerous and demeaning [汚い・危険・賤しい])と見事に通じる。翌年に首相と成った橋本龍太郎は竹下登に「怒る、威張る、拗ねる」の欠点を指摘されたが、「言語明瞭、意味不明」と揶揄された元首相(昭和～平成の交)の辛口寸評は、押韻の「3る」に止まる処が節奏・節度の妙が有る。

新型コロナウイルスが世界で猛威を振るう2020年の師走の初日(12.1)、日本の流行語・新語大賞の年間大賞に「三密」(感染防止の為の回避対象と為る密集・密接・密閉)が選ばれた。14日に京都清水寺の舞台上で森清範貫主の揮毫を以て発表された「今年の漢字」も、応募者投票(208,025票)で2・3位の「禍・病」の合計よりも多い「密」である。世紀の怪病の地球規模の流行、大切な人との関係の密接化、政界・芸能界に多い秘密の露呈が、順当な選択の理由として講釈されたが、漢字の表現力を物語る「1字3(意)味」(造語)は奥深い。

正/従三位・その者、基督教の父・子・聖霊を表す「三位」(「三位」の連声)に引っ掛けて、和製成語「3み」(僻み・妬み・恨み)や拡大版の「七味」(+辛み・嫉み・嫌味・やっかみ)も、韻を踏む形で頭文字の統一と同工異曲である。日本独特の七味唐辛子(唐辛子に胡麻・陳皮・罌粟・青海苔か味噌・麻の実・山椒等を砕いて混ぜた薬味・香辛料)に対し、一味(他の成分を混ぜない唐辛子粉)が有るが、「一か八か」ならぬ1か7で他は無い。日本三大七味の筆頭(東京のやげん堀)が漢方薬の示唆で江戸初期に開発した調味料は、種類も名称も日本人好みである。

七色唐辛子(別称)の「七色」は、虹に鮮明に見える太陽の分光配列の諸色(中国語も同じ「赤橙黄绿青藍紫」)の他に、中国語と同じ「7種類」の意も有る(声変れて色々な声調に為る事、又その声を表す「七色声」等)。日本の七色菓子(近世初期、庚申に備えた干菓子・砂糖豆・煎餅等7種類の菓子。又、盆の供え物として蓮の葉の上に乗せる茄子・瓜等の7種類)と対照的に、中国人は「四色点心」(4つの色を使った菓子。8種類の菓子詰め合せ)を好み、「四色(4種類の風味)小籠包」も5~7を飛ばした「八色」型が同様に人気を博する。

両言語共通の「五味」(5種の味、甘・酸・鹹・苦・辛の総称)は、中国で4字熟語の「五味雜陳」(五味交々。言い表し難い複雑な気持の形容)を生み出した。重層的な五味は仏教で、牛乳を精製する過程の5段階の味(乳味・酪味・生酥味・熟酥味・醍醐味)を指し、仏の教えが衆生の能力に応じて順次深まって行く事に譬える。「三密」も仏語(密教で言う仏の身・口・意の働き。「密」は人間の思議が及ばない処。人間の身・口・意の三業も、絶対なる仏の働きに通じるから三密と称す)として、日本の国語辞書に載っている。

日本語の「脱亜入欧」——「お・も・て・な・し」の大受け——「劇場／激情政治」で効く七五調——古今不易の四六文の伝統——多い2字単語と偶数複合

「三密」対策を頻りに発信した小池百合子（東京都知事）は流行語大賞の受賞者代表と為ったが、彼女の得意技は英語を駆使した「ステー・ホーム」^{S t a y h o m e}（家に居よう）の類の訴求である。都医師会も感染者の高止り^{とどまり}に業を煮やして、「飲み会やるなら every 10 days（10日置きに）」と呼び掛け、近・現代の「脱亜入欧」に由る英語の普及度・効き目を改めて印象付けた。同年のテレビドラマ『半沢直樹』（TBS系）の名台詞「君はもう、おしまいです。お、し、ま、い、Death！」も、英単語を使う駄洒落の意味（死）が万人に解る環境の所産である。

滝川クリステル^{フリー・アナウンサー}（無所属放送員）は2020年五輪開催地を決める国際五輪委員会総会（13.9.7）で、東京招致の謳い文句「お・も・て・な・し」^{キャッチ・フレーズ}を放って成功に一役買い、同年の流行語・新語大賞に輝いた。一方、2019年8月8日に彼女を娶った小泉進次郎^{オリンピック}（衆議院議員）は、翌月に環境相として国際連合の気候行動頂上会談で、気候変動問題に sexy^{セクシー} に取り組むきだと発言し物議を醸した。問題の英単語の多義（「性的魅力の有る様」^{さま}「挑発的な」「俗受けする」等）は議題や場にそぐわず、奇を衒う言い回しが裏目に出て、^{エンジョイ} 愉楽の心算が炎上を招いた。

父親の小泉純一郎は歴代首相の中で稀代の「劇場／激情政治」の魔術師と言え、^{ワン・フレーズ} 1 語・^{ワン・センテンス} 1 文で大衆の心を掴み時局の流れを作る誘導・煽動力はそれこそ魅惑的である。彼は61歳の誕生日（2003.1.8）に首相官邸で記者団に対し、「日々新た。日々日々新た。日に新た。頑張ろう」と七五調で述懐し自らを激励した。大相撲2001年夏場所の優勝者表彰式で、横綱貴乃花に賞杯を渡した後、「痛みに耐えて、よく頑張った！感動した！おめでとう！」と発した絶叫も、^{ほほ} 略七五調で人々の琴線に触れ満場を沸かせた。

その七五調と対極的な古代中国・日本の漢文の四六^{べんれい}（駢儷）文は、4・6字を基本とし、^{ひょうそく} 対句を多用し、平仄の工夫で声調を整え、文辞の華美や典故の繁用も特徴である。現代中国にも根付いた四六文の発想の例を同じ国の最高権力者の言説から拾えば、共産党第8回全国代表大会に於ける毛沢東主席の開会の辞（1956.9.15）の1節が思い浮ぶ。「虚心使人進歩、驕傲使人落後。我們应当永遠記住這個真理。」（虚心は人を進歩させ、傲慢は人を落後させる。我々は永遠にこの真理を憶えて置き当きである）、という文は複数の四六型^{レトリック} 修辭を持つ。

6・6・12字の3句は意味上の区切り（斜線表示）に由って、「虚心／使人進歩、驕傲／使人落後。我們应当／永遠記住／這個真理。」と、全て偶数の組み合わせ（2・4、2・4、4・4・4）である。「虚心↔驕傲」「進歩↔落後」の対、「使人」（人を～させる）の反復、共に第4声の「進歩・落後」、^{レトリック} 「应当・永遠・記住」の同声調語の声調順展開（1+1、3+3、4+4）は、四六文的な感じがする。毛沢東は学者胡適から中共随一の白話（口語文）の使い手と評価され、その言辭

の偶数語句・対・典故の愛用や^{リズム}節奏・声調の流麗は、四六文と通じて中国人の壺に嵌り易い。

党の生命と為る政策・策略に就いての「各級領導同志/務必充分注意, 万万不可/粗心大意。」(各級の指導者の同志は必ず十分に注意し, 絶対に粗略に扱っては行けない)等, 彼は小泉節の七五調と同じ自然な六四調を愛用した。「8大」開会の辞は珍しく自作原稿が気に入らず田家英秘書に代筆させたが, 彼も筆が立つ若輩才子も中国古来の言説表現の基本に則った。「各級・領導・同志・務必・充分・注意・万万・不可・粗心・大意」の様に, 中国語の単語は2字が多い。語形変化が無く接辞が要らない孤立語である故に, 偶数の複合も少なくない。

日本語に入った「椅子・帽子・様子・獅子」等の他, 中国語には「桌子(机)・窗子・鏡子・旗子・孫子・燕子」等, 無意味・無声調の接尾語「子」(zi)で2字を成す単語が一杯有る。「剪(鋏)→剪刀」「斧→斧頭」「眼→眼睛」「象→大象」「虎/鼠→老虎/鼠」「蛙→青蛙」等と共に, 多様な接頭・接尾語を付け1字語を2字語にして慣用する例は沢山挙げられる。『史記』([前漢] 司馬遷撰正史)が初出の「決雌雄」は, 偶数複合の好みから「決一/一決雌雄」(一番勝負で/一気に雌雄を決する)とも言い, 奇数の原形を変えた4字熟語は他にも散見される。

「五体投地」——「五内為_二裂_一」と「五内俱焚」——「五臟六腑」——「五馬分屍」——「五顏六色」「五光十色」「五彩繽紛」——「五花八門」——「五湖四海」

「五味雜陳」(5種の味[^{すっぱい あまい にがい からい しおからい}酸・甜・苦・辣・鹹]が混じり合って, 何とも言い様が無い)の類義熟語「酸甜苦辣」は, 4字と為る様に醬・醋や「開門七件事」外の砂糖・唐辛子より重要な塩の味を除き, 中・日共通の「甘苦」の対や「辛酸・辛苦」を構成する4種を取る。「五」で始まる両言語の4字熟語として, 「五体投地」(両膝・両肘・額を順に地に着けて尊者・仏像等を拜する, 仏教の最高の礼法。中国では極度の敬服の形容)が有る。「五体」の多義(頭・^{くび}頸・胸・手・足/頭・両手・両足/[漢方]筋・脈・肉・骨・皮)は, 何れも対(頭/手・足, 筋・脈, 肉・骨)を含む。

『大東亞戦争ノ終結ノ詔書』(昭和天皇, 1945.8.14)の中の「五内為_二裂_一」は, 中国語の「五内俱焚」(^{だいたも}五内俱に焚かれる。五臟が焼かれる様な内心の焦燥の形容)と言う。両言語の「五内」は「五臟」(漢方で言う5つの内臓, 即ち心・肝・脾・肺・腎)と同義で, 中国では内心を表し「銘感五内」(深い感激を五内に銘じる)等の熟語が有る。共通の「五臟六腑」(五臟+六腑[大腸・小腸・胃・胆・膀胱・三焦])は同じ心/腹の中を指し, 日本語では多く^{からだ}身体全体の意に使うが, 中国医学の理念に有る五行説は全身/内心を表す「五体/内」等の5に体现される。

「五体/内・裂」から思い起す「五馬分屍」の車裂は, 罪人の手・足に馬車を繋いで一気に発進させ四肢・胴体の5つに引き裂く(又は馬や牛を使い, 両足を結び付け二分にする)処刑は, 中国では周~五代十国, 日本では戦国~江戸初期に行われた。日本の牛裂きと違って中国では馬車の使用が正式で, 「五馬」(駟馬[4頭立ての馬車]に^{そえうま}驂を加えた物)を用い五体「肢

解) (肢体分解) の死骸化を表す4字熟語は、『現代漢語詞典』第7版(中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編, 2016。以下『現漢』と略す)の【五内】【五内俱焚】の前に出る(語釈=「車裂」)。

「五臓六腑」と同じ5・6で複合した中国語の「五顔六色」(「同時に現れる」様々な色)は、色取り取りで華やかな様を形容する「五光十色」と共に、派手な多彩を表す成語が少ない日本語には無い。「五彩繽紛」(多彩で煌びやか様)の「五彩」(青・黄・赤・白・黒, 広く色彩全般を指す)も、同義の「五色」と同じく日本では熟語化していない。5+偶数の4字熟語に「五花八門」(古代の五花陣・八門陣。転じて, 多種多様, 雑多交錯, 変化多端, 予測困難の譬え), 「五湖四海」(津々浦々)も有るが, 日本では「五花・八門」の2語も「五湖・四海」の組み合わせも無い。

『日本国語大辞典』第2版(日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編, 本編13巻+別巻1冊, 2000~02。以下『日国』)に有る【五湖】(「中国, 古代の五つの湖。太湖または洞庭湖を五つに区切った呼び名とも, あるいは付近の湖を含めて呼んだともいわれる」), 成句【一に薬を売る】(「昔, 漢の東方朔が乱世を避けて官を辞し, 五湖のほとりで薬を売ったという『列子伝-東方朔』の故事。転じて, 官を辞して野にくだり, 暮らしをたてる」と共に『広辞苑』(新村出編, 1955~)に入らず, 前者の漢籍典拠(「周礼-夏官・職方氏“其河三江, 其浸五湖”)の中の「三江」も同様である。

昔の三江は東・南・西・北に分布する数組が有り, 今は三北(東北・華北・西北)に在る黒龍江・松花江・烏蘇里江が有名である。【三江】(「中国の揚子江・溧水・呉淞江の総称。*経国集[827]一四・奉和清涼殿画壁山水歌(菅原清公)“三江淼々尋間近, 五岳迢々大裏生” 三松江[呉淞江]とその支流二つを合わせた総称)の和文出典は, 同じ3+5と川・山の対が興味深い。5+4の「五湖四海」は実の5大湖(淡・鹹水湖を含む青海湖・鄱陽湖・洞庭湖・太湖・呼倫湖)と虚の四海(四方の海の内, 全国各地)の組み合わせで, 五行の5と四季・四方の4の相性の良さを呈する。

「五倫」と「三綱五常」——「四書五経」と「五講四美三熱愛」——「三従四徳」と「五障三従ノ七去」

『現漢』の【五馬分屍】の前の【五倫】(「封建時代に称された君臣・父子・兄弟・夫婦・朋友の5種類の倫理的関係」)は、『広辞苑』でも詳解してあり(第7版[2018] = 「孟子滕文公上」 儒教で, 人として守るべき五つの道。父子の親, 君臣の義, 夫婦の別, 長幼の序, 朋友の信をいう), 熟語項【五倫五常】(「儒教で, 人として守るべき道徳である五倫と五常」)も付いている。【五常】(「儒教で, 人の常に守るべき五種の道徳。⑦[白虎通性情] 仁・義・礼・智・信。④[書経舜典, 伝] 父は義, 母は慈, 兄は友, 弟は恭, 子は孝)の諸説併記は, 同時代の中国以上の儒教尊重の良風を窺わせる。

【三綱五常】(「儒教で, 人として守るべき三つの大綱[三綱]と五つの道徳[五常]」)。「三綱」=「[白虎通三綱六記] 儒教で社会の根本となる三つの大綱, すなわち君臣・父子・夫婦の道」)は、『現漢』にも有る(「封建的礼教が提唱した人間関係の道徳基準。三綱は父が子の綱と為り, 君が臣の綱と為り, 夫

が妻の綱と為る事を指す。五常は諸説が有り、通常は仁・義・礼・智・信を指す。略称「綱常」), 「五倫」と同じ両国での定着は5の魔力を思わせる。儒家の教典「四書五経」(『礼記』中の『大学・中庸』+『論語』『孟子』, 『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』)も、4(2篇+2作の合成)+5である。

改革・開放期の「社会主義精神文明」の行動規範の眼目として、「五講」(「講文明、講礼貌、講衛生、講秩序、講道德」[文明を重んじ、礼儀を重んじ、衛生を重んじ、秩序を重んじ、道德を重んじる]) + 「四美」(「心靈美、語言美、行為美、環境美」[心を美しくし、言葉を美しくし、行動を美しくし、環境を美しくする])の合言葉が、1981年に打ち出され熟語化した(『現漢』立項)。翌々年に追加した「三熱愛」(「熱愛祖国、熱愛社会主義、熱愛共産党」[祖国を熱愛し、社会主義を熱愛し、共産党を熱愛する])と合せて、「五講四美三熱愛」(略称「五四三」)の通称が定着した。

中共は建国(1949.10.1)の直前から国民の公德として、「五愛」(「愛祖国、愛人民、愛労働、愛科学、愛護公共財物」[祖国を愛し、人民を愛し、労働を愛し、科学を愛し、公共財物を愛護する])を要求した。1982年の憲法改正に由り「愛護公共財物」は「愛社会主義」に取って代えられ、直後に共産党を対象に加える重点集中の強化版「三熱愛」が登場した。「五湖四海」「四書五経」と同じ5+4の「五講四美」と対を成す並列は、「三綱五常」の3+5型と声調順(第3声の「講・美」+第4声の「熱愛」)で受け入れられ易い。

「四美三熱愛」の数字を含む「三従四徳」(『現漢』=「封建的礼教が女性を束縛・圧迫した道德基準の1つ。三従は“未婚時は父に従い、嫁いだ後は夫に従い、夫の死後は子に従う”。四徳は“婦徳、婦言、婦容、婦功”[女性の徳目・女性の言辭・女性の身嗜み・女功])は、『広辞苑』の【三従】(「儀礼喪服伝」女性が従うべきとされた三つの道。すなわち家にあつては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うこと), 【四徳】②(「[礼記昏義] 婦人が修養・実行すべき四つの徳目、すなわち婦徳[貞順]・婦言[言葉遣い]・婦容[身だしなみ]・婦功[家事]。四行)に出るが、合成4字熟語が無い。

【三従】の用例「“五障一”“七去一”」の前者(「[仏] 女人にあるとされる五障¹と三種の忍従。ごしょうさんしょう。→三従」, 【五障】①=「女人にあるとされる五種の障礙², すなわち梵天王・帝釈天・魔王・転輪王・仏身の五つになり得ないとするもの。法華経提婆達多品に説く。五つのさわり。五礙³。五つの雲」)は佛教語で、後者は中国由来・両国共通の「七去」のみが立項される(「[大戴礼本命] 妻を離縁できる七つの事由。すなわち、父母[舅姑]に順でないこと、子のないこと、多言なこと、窃盗すること、淫乱なこと、嫉妬すること、悪疾のあること。律令などに規定。七出」)。

7・5・3好み——「七教/情/竅/彩/七/夕/言詩/弦琴」——「七步之才」 ——「七巧板」——「七擒七縱」

日本語に「三従四徳」が無く「五障/七去三従」が有るのは、再び7・5・3好みの現れのように思える。【七去】の次の【七教】(「①[礼記王制] 人倫の七つの教え、即ち君臣・父子・夫婦・

兄弟・朋友・長幼・賓客に関する道義。② [大戴礼主言] 民を治める七つの根本の教え。敬老 [老人を敬う]・順齒 [目上の者に従う]・楽施 [ほどこしを楽しむ]・親賢 [賢人につき従う]・好徳 [徳を好む]・悪貪 [貪欲をにくむ]・強果 [強くてきばきしている]) は、『日国』では両義中の前者しか出ないが、『現漢』では儒教の衰微と7点1組の総称の相対的な少なさを映す様に入れてない。

『現漢』の親字【七】の見出し語21は【六】の18より多いが、【一】の362, 【二/両】の123 (63+60), 【三】の114, 【五】の75, 【四】の64, 【八】の41, 【十】の39, 【九】の23, 又【万】の59, 【百】の69, 【千】の41よりも少ない。【七七事変】(1937年7月7日の盧溝橋事変), 【七一】(中共建党記念日の7.1), 【七月流火】(『詩経』の成句に拠る陰暦7月の異称[『広辞苑』『日国』の【流火】に記述有り]。原義は夏が去って秋が来、段々涼しくなる事、現代の「炎天」の意は7月を西暦に、「火」[星宿]を灼熱と誤認した所産)等、区切りや纏まりを表さぬ語も有る。

『広辞苑』の【七教】の次の【七竅】(「①人の顔にある七つの穴。目・耳・鼻 [以上各二] および口の総称。七孔。七穴。→九竅。②聖人の心蔵にあるという七つの穴」)は、新版追加の②を除いて『現漢』(「两眼・両耳・両鼻孔と口を指す」と同義であるが、後者には中毒や衝撃に由る惨状を表す「～流血」(七竅から血が流れる)という用例が付く。【七竅生煙】(「憤慨、焦燥或いは渴きが頂点に達し、耳・目・口・鼻から火が出る様な有様の形容」)は、日本語の「顔から湯気が出る」(かんかんに怒る)よりも迫力が有り、不穏な事態や激越な情緒、不意の受難が多い国柄を物語る。

【七竅】の他【七彩/古/絶/律/情/夕/弦琴】は両言語共有(「七彩」は「二日物語 [1892-1901]〈幸田露伴〉」の和製、同義の中国語「七采」は晋代の『西京雜記』に有り)で、【七七】(七七日)と【七言詩】(七言古詩/絶句/律詩の略と為る前出3語の総称)も曾て日本に入った(『日国』採録、『広辞苑』未収)。【七歩之才】(「敏捷な文才を指す。1713頁の『煮豆燃其』を見よ)も『広辞苑』に有り(「『世説新語文学』魏の曹植の兄曹芳の命によって七歩歩む間に詩を賦したという故事から]作詩の才の最もすぐれてしかも早いこと。七歩成蹊。→豆を煮るに其誌を然く」), 参照指示の項まで一緒である。

日本語と違う【七巧板】(正方形の薄板や板紙を7枚の小片に分割し、その組み合わせで色々な図案を作る玩具。該当する『広辞苑』の「タングラム [tangram]」では旧版の結びの「中国発祥とされる。知恵の板」を「一九世紀以降ヨーロッパで流行した。→知恵の板」と改め、修訂後の【知恵の板】は「江戸中期以降流行した、種々の小さい板を集めて様々な形をつくる遊具。中国で考案された。タングラムも同類。知恵後」), 【七種競技】(ヘブラスロン。女子陸上競技種目、2日掛りの100m障害競走・走高跳・砲丸投げ・200m競走/走幅跳・槍投・800m競走で総得点を競う)は、この文脈で7の可能性と極限を示す。

曜日数の7の区切りの働きは「七擒七縱」にも現れ、『日国』のこの熟語項(『三国志演義』等の漢典は欠落)は「七縱七擒」に同じとし、当該項(「諸葛孔明が敵将孟獲 [もうかく]をとらえ、とりこにしてから自分の陣形を教えて放してやった。それを七回繰り返した末に、孟獲はついに恐れいり、以後はそむかなかったという〈中略〉故事から)敵を七回放して、七回とりこにすること)は、漢典(「章孝標-諸葛武侯廟詩“七縱七擒何処在、茅花檉葉蓋神壇-”」)の韻律に合せた逆順番(正しくは「擒

→縦)を規範とするのが可笑しいが、物事の周期や限度の好例を日本語に入れた意義が有る。

三国時代の「煮豆燃豆箕」「同根相煎」の骨肉反目——『礼記』発の「不俱 / 共 / 同戴天」「父 / 兄弟 / 交遊之讎」

『広辞苑』の【豆を煮るに其^{まめ}を然^{まめがら}たく】(「曹植、七歩詩」[曹植^{せいつく}が、その才をねたんだ兄の曹丕^{せうひ}に迫害され、七歩あるく間に詩を作れと言われて作った詩に基づく]兄弟が傷つけあうことのとえ。豆^{まめ}箕^{まめがら})、『日国』の【豆を煮るに其^{まめ}をたく】(「魏の曹植が、兄の曹丕[文帝]から、七歩あるくうちに詩を作ることを命ぜられて作ったと伝えられる“煮^{まめ}豆^{まめ}燃^{まめがら}豆^{まめ}箕^{まめがら}、豆^{まめ}在^{まめがら}釜^{まめがら}中^{まめがら}泣^{まめがら}。本是同根生、相煎何太急”という詩から]豆を煮るのにその豆のからを燃料として用いるの意で、兄弟どうし、仲間どうしが互いに傷つけ合うことのとえ)は、古くから伝来した(「世俗諺文鎌倉期点[1250頃]。)

『現漢』未収の「同根」は『広辞苑』で両義が有り(「①その生えてた根が同一であること。“一の事件”②兄弟。雨月二“畠山が一の争ひ果さざれば”)、『日国』の【同根】Ⅰに合併される(「根本が同じであること。その生え出た根が同じであること。また、その同じ根。転じて、兄弟。同根生)。初出(「太平記[14C後])の後に和製漢語「同根生」が生れた(「“どうこん[同根]①”に同じ。*文明本節用集[室町中]“魏曹子建七歩詩云、煮豆燒^{まめ}豆^{まめ}箕^{まめがら}。豆^{まめ}在^{まめがら}釜^{まめがら}中^{まめがら}泣^{まめがら}。本是同根生[どうこんせい]相煎何太急”)が、『広辞苑』未収語の出典は近親憎悪・骨肉反目の不俱^{たい}戴天の程を物語る。

「不俱戴天」(『広辞苑』=「[礼記曲礼上]“父の讎^{あだ}は与^{とも}に共^{とも}に天を戴^かかず、兄弟の讎^{あだ}は兵に反^あらず、交遊の讎^{あだ}は、国を同じゅうせず”[父の仇は必ず殺すべきであって、共にこの世に生きてはいない意]命をかけても報復しなければやまないほど深く怨むこと。不同戴天。ぐふたいてん。“一の敵”)は、「俱に天を戴かず」(「“不俱戴天^{ふぐたいてん}」の訓読)相手を殺すか相手に殺されるか、一緒にはこの世に生きていない。どうしても生かしておけない深いうらみをいう)の形も有る(「不同戴天」は『日国』にも無い)が、原文の「共」を訓読で同音の「俱」に変えた処は和製熟語らしい。

『日国』の【不俱戴天】(「[礼記-曲礼上]の“父之讎、弗^ふ与^{とも}共^{とも}戴^か天、兄弟之讎、不^ふ反^あ兵、交遊之讎、不^ふ同^あ国”による語。ともに天をいただく意から]相手をこの世に生かしておかないこと。殺すか殺されるか、いっしょには生存できない間柄であること。怨みや憎しみが深く報復せずにはいられないこと。また、そのような間柄)の他に、中国語と共通の「とも-に【共-俱-】天を戴かず」(「[礼記-曲礼上]の“父之讎、弗^ふ与^{とも}共^{とも}戴^か天”から]殺すか殺されるか、いづれにせよいっしょにこの世には生きていない。多く、あだを報いる決意を述べる時にいう。不俱戴天[ふぐたいてん])も有る。

【共/俱に】『連語』の【同訓異字】(「ともに【共・俱・与・同・伴・供・具・偕】」)は、中国語では「俱・具」(俱にjù)しか同音組が無い。【一天^{てん}を戴^{いた}かず】の例(「書紀[720]」「太平記[14C後]」「浄瑠璃・姫山姥[1712頃]」「読本・昔話稲妻表紙[1806]」「軍歌・元寇[1892]」(永井建子))の表記は、「共/とも」(第1・2・4/3点)を経て最後に「俱」と為った。【不俱戴天】の3点(「歌

舞伎・四十七石忠矢計〔十二時忠臣蔵〕〔1871〕「浮雲〔1887-89〕〈二葉亭四迷〉」街道記-ささやま街道〔1936〕〈井伏鱒二〉は、「共に→俱に」の変化と共に明治以降の中国語との乖離を示す。

類語中最古の「不同戴天」（初出＝『春秋公羊伝莊公四年』〔漢〕何休注）は日本へ入らぬ儘に廃れ、中国で「不共戴天」（同＝〔宋〕羅大経『鶴林玉露』卷八）が定型と為った。『現漢』の項（「讐敵と同じ天の下に生きていない。恨みが極めて深い事の形容」と比べて、『広辞苑』の用例や『日国』と同じ出典付きは「語源国」（「水源地」「資源国」を振った造語）以上の扱いである。怨恨の対象をこの世に生かして置けない意志の明言も『現漢』は及ばないが、日本の両辞書の「（相手）を殺すか（相手に）殺されるか」の2択は中国的な発想と異なる。

「你死我活・是死是活」——「ハムレット型」と「ドン-キホーテ型」——“to be or not to be” → 「生か死か / 生存或毀滅」 「可いのか、行けないのか / 偷生、還是抗争」

「余の辞書に“不可能”は無い」と伝えられたナポレオン1世（^{フランス}仏蘭西の皇帝）の口癖は、本来は「“不可能”は仏蘭西語（又は仏蘭西的）ではない」、元は「“不可能”は愚か者の辞書にのみ有る」、他に「仏蘭西人は“不可能”を語っては成らぬ」説も有る。国語辞典の採録・解釈・例示に国民性が現れるのは日・中の場合も多分に漏れず、「不俱戴天」の「生きるか死ぬか / 食うか食われるか」と似た「你死我活」（『現漢』＝「闘争が非常に激烈な様の形容」）は、「お前（相手）が死ぬ（なら）、私（自分）は生きる」の意に中国的な激越・強気が込められる。

「生きるか死ぬか」の英訳に有る“dead or alive”と同じ語順の「死活」は日・中共有で、中国語の「是死是活」（死ぬか生きるか）は価値 / 声調順（第1・3声）の「生死」と反対に、逆価値 / 声調順（第3・2声）の「死・活」で存亡の瀬戸際に於ける死滅の恐れを強調する。「你 vs. 我」「死・活」の2対から成る四字熟語は、「相手が死ねば自分は生きる」の意で「相手が死に自分は生きる」とも取れる。初出（〔元〕無名氏『度柳翠』第一折「争長競短、你死我活」）の前半（長短を争い競う）と同じ構造ながら、「你死→我活」の1択の展開や信念も含まれる。

^{シェークスピア}沙翁の4大悲劇（『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』）の筆頭で、^{デンマーク}丁抹の王子は感情の葛藤、狂気偽装の重圧、恋人の死別に耐えた末、父王を毒殺した叔父と不貞の母への復讐を遂げて死ぬ。「ハムレット型」（『広辞苑』＝「ハムレットのように、思索・懐疑の傾向が強く、決断・実行力に乏しい人物の型。ツルゲーネフの分類による。↔ドン＝キホーテ型」）。「日国」＝「〔シェークスピアの同名の作品の主人公名から〕懐疑的で思索癖が強く、いつもあれかこれかと悩み、決断を延期してしまう性格。ドンキホーテ型に対していう」の優柔不断は、有名な2択問題を後世に残した。

「ドン-キホーテ型」（同＝「ドン＝キホーテのように、現実を無視して独りよがりの正義感にかられ、向う見ずの行動に出る人物の型。ツルゲーネフの分類による。↔ハムレット型」）。「[セルバンテスの小説の主人公名から] 現実を無視し、ひとりよがりの正義感にかられて、理想に突進する人物の類型。思索的で

実行力に乏しいハムレット型に対していう)は、同じ大正後期に対義語(初出=「社交用語の字引[1925]〈鈴木一意〉)より早く出た(同=「新しき用語の泉 [1921]〈小林花眠〉)。西欧の同時代の作家に由る同時期の名作に対極的な人物類型が造形されたのは、事実は小説より奇也なりと言えよう。

彼の英国の劇作家・詩人(1564.4.26~1616.5.3)と西班牙スペインの作家(1547.9.29~1616.4.22)は逝去が近く(長らく同日[4.23]とされ後に11日の間隔があると修正された[セルバンテスはグレゴリウス暦の22日が正しく、沙翁の4月23日はユリウス暦])が、両作品も時期が余り離れていない(『丁抹王子ハムレットの悲劇』は1601年頃、『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』前・後編は05・15年)。19世紀の露西亜ロシア3文豪の1人(他はドストエフスキーとトルストイ)が正反対と捉えたのは、中国と通じて欧亜大陸でも対の発想が多い事を示唆する。

パスカル(仏蘭西の哲学者・数学者・物理学者)が人間の弱さと強みに警える「考える葦」は、常に判断に迷うハムレットの思索鋭敏・行動遅鈍にも該当する。苦慮の名台詞“To be or not to be, this is the question.”は、実録文学『客室乗務員は見た!』(伊集院憲弘, 2007)にも登場した。日本航空JAの客室乗務員嬢が白人男性から座席の確認で“2B or not 2B?”と訊かれ、反射的に“that is the question!”と答え爆笑を誘った。「高空の花」(「航空」「高嶺の花」を合成した造語)に相応しい教養と共に、不朽の名言・迷言の日本に於ける普及度を感じる。

久米正雄(作家)訳(1915)の「生か死か……それが問題だ」等、「生(きる当き)か死(ぬ当き)か」は20世紀に定訳と為り、「在る/在らぬ」「やる/やらぬ」「する/しない」は市民権を得ていない。中国でも高名な朱生豪(翻訳家)訳(1943)を始め、「生存或毀滅」(生存或いは毀滅)や「是生、還是死」(生、それとも死)が主流である。「不共戴天」の由来と為る亡父の為の復讐で死滅が出るのは情理に適うが、非道な運命の矢弾やだまに我慢するか、苦難の荒波に直面し決着を付けるか、という次の自問が“to be or not to be”だとする異論も両国に有る。

沙翁全戯曲37作の個人全和訳は坪内逍遙(小説家・劇作家・評論家)が最初(1909~28, 33~35年新訂)で、次(73~80, 完結年に芸術選奨文部大臣賞受賞)の小田島雄志(英文学者・演劇評論家)は、翻訳家泣かせの2択を「このままでいいのか、いけないのか」と訳した。中国語の思考でも今の生き方の可否(可いか、行けない[「不行」と同じ「行」(行ける)の否定]か)、是非(「是生、還是死」の「是」は英語のbeに当る連結動詞で存在等を表す[「還」=又は、「還是」=それとも])の意は、逍遙訳(1933)の「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢゃ」等より頷ける。

中国の非専門家の私案は“to be”を「苟且偷生」(暫しの生を偷む)、めす“not to be”を「奮起抗争」(奮起して抗争する)と訳し、簡潔の為に4字熟語を略して「偷生、還是抗争、這是個問題。」(偷生か、抗争か、此れが問題だ)とする。「偷生」(『現漢』=「働一時凌ぎで生きている。“生を偷み目先の安逸を貪る”[原文=「~苟安」])は、『日国』にも有る(「[生命を盗む意から]無益に生きながらえること」, 初出=「南郭先生文集-二編 [1737]」, 漢典=「国語-晉語八」)が、『広辞苑』所収の「偷○」の項は【偷窃】【偷生】程度で、『現漢』の同23の単語・成語に遠く及ばない。

「嘔心瀝血」——「苦心慘憺／孤詣」「慘憺經營」——「腐心・切齒・扼腕」
——「切齒痛恨・扼腕嘆息」——腐／宮刑——重罰と偉業

和製漢語「抗争」（『広辞苑』＝「さからいあらそうこと。はりあいあらそうこと。“大国間の一”。『日国』の初出＝「経国美談 [1885-86]（矢野龍溪）」）は、逆に『現漢』で例文付きの収録がしてある（『勳対抗する。闘争する。“道理に基づいて抗争する”）。尤も、『広辞苑』は「生を偷む」を採っており、語釈（「死ぬべき時に死なずに恥をしのんで生きながらえる。いのちをむさぼる」）は『現漢』よりも辛辣で、『日国』（漢典「李陵-答蘇武書」付き [李は俘虜として匈奴の地に20余年に生き長らえた前漢の将軍]、和文用例無し）に無い「恥をしのんで」に「恥の文化」の意識を覗かせる。

中国の沙翁全戯曲の個人訳は朱生豪（出版社・新聞社の編集者を経て無職）が最初に挑み（24歳の1936年～44年病没）、日中/太平洋戦争中の上海/同市公共・仏蘭西租界陥落で2度も原稿全滅（焼失/紛失）に見舞われた後、貧苦・虚弱（末期は肺結核）の身で31.5作（『ヘンリ五世』は第1・2幕で絶筆）を仕上げた。「嘔心」（『現漢』＝「勳知恵を絞る事の形容 [多く文芸の創作に用いる]。“心血を注いだ作品”）、「嘔心瀝血」（「心血を費やし尽す事の形容。“教育事業の為に心を嘔き血を瀝ぐ”）は、現代中国の創作（及び翻訳の再創作）活動の数多い苦労話の中で特に彼に相応しい。

日本語の「苦心」（『広辞苑』＝「物事をなしとげようとして、いろいろに心を使って苦勞すること。“一して仕上げる”“一之作”）。『日国』＝「ある物事をうまくなしとげようとしてあれこれと考えて苦勞すること。苦慮。腐心」、初出＝「補庵京華統集 [1480-82]」、漢典＝「淮南子-原道訓」）は、「漢源」（中国語由来。日本語由来の外来語を表す中国語の「日源外来詞」に因む）語彙群の中で、両言語共通度が高い方に入るが、和製熟語「苦心慘憺」（同＝「非常に苦勞して心を砕き痛めること」/「非常に苦勞して工夫をこらすこと」、初出＝「統一年有半 [1901]（中江兆民）」）は再創作の加工である。

中国語の「苦心」はもっと能く使われ（『現漢』＝「①苦勞してある物事に用いる知力或いは精力。“大いに苦心する”“誠心誠意”②勳知恵を尽す。“苦心して研究する”“苦心して經營する”）、熟語の「苦心孤詣」（同＝「研鑽或いは經營に知恵を尽して、他者の達し得ない境地に到達する。[孤詣＝独自で到達する境地]」）は、苦心を費やす事に言う「慘憺經營」（「經營」＝計画・組織・管理を行う）と共に日本語には無い。逆に「腐心」（『広辞苑』＝「[ある事を実現しようとして]心をいため悩ますこと。苦心。“事業再建に一する”」）は、原産地では疾^{しつ}くんに死語同然である。

『日国』（「心をなやますこと。ひどく心を使うこと。苦心すること」）の初出（『妻 [1908-09]（田山花袋）二七“所謂善を行ふことにのみ腐心 [フシン] せる人は”」）は、漢典（『史記-刺客伝荊軻“此臣之日夜切齒腐心也”」）の苦慮の意味を踏んでいる。【補注】（「切齒腐心」は『戦国策-燕策』に同音で「切齒拊心」の例があり、「拊」は“うつ”の意であるが、いずれも心を悩ますさまの甚だしいことをいう）と照らせば、【切齒】①の引用（『戦国策-燕策-王喜“此臣之日夜切齒拊也、乃今得聞^{【ママ】}教”」）

は「心」が抜けた(『史記-刺客伝荆軻』の次の句も「乃今得聞教」)が、語義は基本的に変らない。

その語義(「齒と齒とをきしり合わせること。齒をくいしばること。はぎしり。はがみ。転じて、きわめて無念に思うこと。またひどく憤慨すること)は、『広辞苑』で①②に分け後者(「ひどく無念に思うこと)に憤慨が無い。和製熟語【切齒扼腕】(「[史記張儀伝] 齒ぎしりをし、自分の腕をにぎりしめること。感情を抑えきれず甚だ憤り残念がること。『日国』引用の原典=「是故天下游談士、莫不_不日夜搯腕瞋目切齒、以言_二從之便_一、以說_中人主_上」)には有り、『現漢』の【切齒】(「齧齒をきつく食いしばる。非常に憤り恨む事の形容。“切齒痛恨”“切齒の仇”)も、両言語共通の「憤恨」を強調する。

日本語の「扼腕」(『広辞苑』=「憤慨したり残念がったりして自分で自分の腕を強く握りしめること。“切齒一”。『日国』=「自分で自分の腕を強くにぎりしめること。憤ったり、残念がったりするさまをいう。切齒扼腕」, 漢典=「戦国策-魏策-哀王“天下之遊士、莫不_不日夜搯腕、瞋_レ目切_レ齒」)と違って、中国語(『現漢』=「(文) 勳片手で自分のもう1本の腕を握って、昂揚[原文は“振奮”]・憤怒・残念等の感情を表す。“扼腕嘆息”)は、原義の負の感情の他に奮い立つ気分も加わり、より幅広くより重層的でより奥深くより力強い表現を目指す志向が見て取れる。

「腐心・切齒・扼腕」の出典の著者司馬遷は太史守(太守寮の長官)在任中に、李陵の敵国への不本意な降伏を弁護して準極刑(造語)の腐/宮刑(去勢)に処された為、発憤し父談(前任者)の志を継いで『史記』130巻を完成した。『日国』の【生を偷む】の漢典は李陵『答蘇武書』の1節(「子卿視_レ陵豈偷_レ生之士而惜_レ死之人哉」)で、【腐刑】(「古代中国の刑の一つ。男女とも、生殖能力を奪う刑。宮刑。また、その刑罰を受けた罪人」)の漢典は、司馬遷『報任安書』の1節(「太上_不辱_レ先、(略)其次毀_レ肌膚_一断_レ肢体_一受_レ辱、最下腐刑極矣」)である。

『広辞苑』の【腐刑】(「宮刑_註に同じ)に対して『現漢』では採録せず、【宮刑】の語釈(「古代の、生殖器を切り取る残酷な肉刑」)は、日本の両辞書の項(「古代中国の刑罰。男子は生殖機能を去り、女子は幽閉した[2008年版=「幽閉もしくは筋を除いた」]という。死刑につぐ重刑。五刑の一つ。宮。腐刑・宮割・淫刑とも」/「古代中国の刑の一つ。男女とも、生殖能力を奪う刑。一説に、女子は宮中に幽閉されたとも。腐刑。宮」, 漢典=「礼記-文王世子“公族無_レ宮刑_一、不_レ翦_レ其類_一也”」, 初出は【切齒】と同じ「史記抄[1477]」)と比べて、処刑法と同じ一刀両断調で身も蓋も無い。

和製漢語「処刑」(『広辞苑』=「刑に処すること。特に、死刑に処すること。“戦犯として一する”)。『日国』の【処刑・所刑】=「刑罰を加えること。科刑。特に、死刑に処すること)は、初出(「新聞雑誌-五五号・明治五年[1872]七月“其国法の苛刻なる、其処刑の残忍なる恤[あはれ]む可き事ならずや」)に中国の酷刑の投影が見られる。宮刑は誇りの男性機能を奪い望みの子孫繁栄を絶つ冷酷極まり無い重罰で、司馬遷は偉業の為に甘受するか自害で汚辱から解脱するかの選択に迫られたが、“not to be”ならぬ“to be”の決断で至高の「嘔心瀝血」の巨篇が出来た。

九刑→五刑/罪——生命/身体/自由刑と肉刑——「身体髮膚、受之父母、不

敢毀傷，孝之始也」——「1粒の麦」の死と不死——「好死不如頼活」

「五刑」(『広辞苑』 = 「①〔書経舜典〕中国，周代にあったとされる五種の刑罰。大辟^{たいへき}〔死刑〕・宮〔男子は去勢，女子は幽閉〕・荆^{けい}〔足きり〕・劓^{げい}〔鼻きり〕・墨〔いれずみ〕をいう。②〔周礼秋官，大司寇〕犯罪の五つの類型。野刑〔農を怠る〕・軍刑〔軍律にそむく〕・郷刑〔不孝など〕・官刑〔職務を怠る〕・国刑〔国民として秩序をみだす〕をいう。③中国の隋・唐律，日本古代の律に規定された五種の刑。笞^ち・杖^{じょう}・徒^と・流^{りゅう}・死^し〕〔2008年版の最後に「の総称。五罪」と有った〕は，古代中国に於ける断罪・刑罰の一体化と五倫/常や五体/内/臓に通じる類型を示す。

「九刑」(『広辞苑』 = 「中国の周代の刑罰で，五刑および流・贖^{じやく}・鞭・扑^{ぱく}の諸刑の総称。→五刑」)。「日国」 = 「古代中国，周の時代に定められた九つの刑罰法。墨〔ほく = いれずみ〕，劓〔ぎ = はなきり〕，荆〔ひ = あしきり〕，宮〔きゅう = 去勢・鎖陰〕，大辟〔たいへき = 死刑〕の五刑と流〔る = 放逐〕，贖〔しょく = 罰金〕，鞭〔べん = 笞刑〕，扑〔ぱく = 笞刑〕」は，漢典(「春秋左伝 - 昭公六年」)由来なのに『現漢』には無い。【五刑】(「我が国の古代の五種の主な刑罰。商・周の時代には墨・劓・荆・宮・大辟を指し，隋以降は笞・杖・徒・流・死」)は，次の【五行】と合せて5に収斂した必然性を思わせる。

『日国』の同項(「罪人に対する五つの刑罰。古代中国では墨〔いれずみ〕，劓〔はなきり〕，荆〔あしきり〕，宮〔男子の去勢，女子の陰部の縫合〕，大辟〔くびきり〕をさす。隋・唐の時代には，笞〔ち = むちで打つこと〕，杖〔じょう = つえで打つこと〕，徒〔と = 懲役〕，流〔る = 遠方へ追放すること〕，死〔死刑〕の五つをいう。日本では，大宝・養老律以後この隋・唐の方式がとられ，近世まで行なわれていた。→五罪，初出 = 「書経 - 舜典」)の通り，日本では「五罪」(「律による刑罰。笞，杖，徒，流，死の五種。五刑」)。「広辞苑」 = 「日本の律による五種の刑。→五刑」)の称で改良版が導入された。

最古の五刑は生命刑(「広辞苑」 = 「生命を奪う刑罰。死刑」)の大辟を除いて，全て身体刑(「受刑者の身体に物理力を行使する刑罰。入墨・笞刑^{ちけい}・杖刑^{じょうけい}の類。懲役・禁錮などの自由刑はこれとは異なるが，俗にこれをも含めていうことがある。体刑」)である。差し替えて自由刑(「自由の剥奪を内容とする刑罰。懲役・禁錮・拘留の総称。↔財産刑」)の徒刑・流刑を入れた結果，4種中の半分に減り，体の一部を切り落す蛮行も禁じられた。日本の大宝/養老律(701年制定，18年改定)は唐律を模した故，1世紀余り前までの悪名高い旧法に染まらずに済んだ。

『現漢』には和製漢語の「生命/身体/自由刑」は無く，代りに有る「肉刑」(「人間の肉体を酷く毀損する刑罰」)は，『日国』では収めている(「肉体に対して課される刑罰。特に身体の一部を傷つける刑罰。入れ墨・鼻切り・足切り・宮刑などの類」，漢典 = 「史記 - 孝文本紀」)が，『広辞苑』の不採録が示す様に日本では拒否反応さえ感じられる。日本人は遊牧民族・肉食系と対蹠に在る農耕民族・草食系の性質が強い為か，自虐的な切腹自殺は特異な例外として扱^さて置き，刃物で動物の体を弄る感覚で人体を切り裂く刑罰に向く嗜虐性が伝統的に無い。

中国の酷刑は「九刑」の語源(「周有^{しゅう}乱政^{らんせい}，而作^{しゅう}九刑^{きゅうけい}」)の通り統治維持の為に有り，「身

体髪膚これを父母に受く」(『広辞苑』 = 「[孝経開宗明義章] 身体髪膚、之を父母に受く、敢て毀傷せざるは、孝の始め也」] 人間の体はすべて親から受けたものであるから、これを傷つけないように努めるのが孝行の第一である)と表裏一体で、五常に入る儒教の徳目の孝を全うするのに必要な完膚保全の努力は犯罪抑制の働きが有る。忌々しい宮刑で司馬遷は親から受けた体の要所を抉られ、子孫断絶に由る親不孝の上に男根の剔出で親孝行も受け得ず多重の喪失を強いられた。

史官の彼は皇室図書館の文献を読み漁り、太初暦の制定(起点=前 104.11.1 甲子の日)を進め太初改元後『史記』を書き始めた。執筆7年目の受刑後は恥を忍んで生き長らえ翌々年に中令郎(帝の秘書長)として再起し、栄転ながら宦官が付く職位の屈辱を噛み締めた。腐刑は腐った樹木が実らない様に子が持てない意も有り、中国人の持続的な自我実現の形態に有る子孫存続を根刮ぎ断たれた打撃は絶大である(「宮刑・根刮ぎ」の各1字を含む中国語の「刮宮」も未然の出産を消す意が有り、主に中絶目的の搔爬[子宮腔内面を搔き取り内容を除去する手術]を表す)。

「1粒の麦、地に落ちて死なずば、只1粒にて有らん。若し死なば、多くの実を結ぶ可し」、という基督の言(『新約聖書・ヨハネ福音書』第12章)は新陳代謝・生々流転の哲理に富むが、現世至上・自己本位思考と長命・不朽願望が強い中国では「生存或毀滅」の選択に当って、「好死不如頼活」(立派に死ぬは姑息に生きるに如かず)と言う様に至極当然に前者に傾く。李陵も6倍の敵と善戦し矢付き刀折れの果て潔い自尽でなく不面目の投降を決断したが、彼は初め完全には匈奴の軍門に降らず実力を温存して帰還の機会を伺ったのである。

武帝も暫くしてから彼を理解し奪還を命じたが未遂に終り、逆に「李將軍」(実際は別人の李緒)が敵に漢の軍略を教えているとの誤報を鵜呑みにして、彼の一族を妻子から祖母・従弟まで皆殺しにし、李陵は悲運に嘆き悲しみ李緒を殺した後に匈奴に帰順した。司馬遷も激怒の帝から死罪判定を食い極刑を免れるよう死1等減の宮刑を乞うたが、殺されて了えば罪人の悪名と『史記』の未完を遺し到底「好死」と成らず、生き延びれば潰された遺伝子伝承の種(子孫)の代りに多くの実を結べる、というのが不格好な「頼活」の合理性である。

李陵と「飛將軍」李広——「蘇武牧羊」の苦節19年——「雁の便り」と「魚雁」——司馬遷と蚕室——極限状況下の「極限選択」

『広辞苑』の【李陵】(「前漢の將軍。李広の孫。字は少卿。成紀[甘肅泰安]の人。武帝の時、匈奴と戦って捕らわれ、單于ぜんの女むすめを妻とし、その地にあること二十余年で没。親友の蘇武と唱和した詩は五言古詩の起源という。友人の司馬遷が彼を弁護して宮刑に処せられたことは有名。前七四)は、不立項の李広に「名將」の説明を付けず武將名門の背景が伝わらない。「飛將軍」(『日国』 = 「[中国の匈奴が漢の李広を恐れてこう呼んだことによる]行動が敏速で武勇のすぐれた將軍。飛將」、漢典 = 「史記-李陵伝」)の誉れを知れば、先祖の栄光を汚した恥辱の甚大をより痛感できる。

一方の蘇武は採録してある（「前漢の名臣。字は子卿。京兆杜陵〔陝西西安〕の人。武帝に仕え、中郎将で匈奴きとに使用して捕らわれる。抑留生活一九年の後、昭帝のとき匈奴と和解が成立し、長安に帰る。夷狄の降伏者を担当する典属国に任ぜられ、のち関内候関内候→雁かりの使い）が、旧版の「陝西杜陵の人」を古今地名の併記に直す精緻化の半面、「抑留生活一九年、節を守って降伏せず」の後半を削る改訂は、不屈の忠誠心を貫く苦節19年の割愛で点睛を欠く憾うらみが有り、中国で英雄視される節操死守と李陵の晩節不全（造語）の対蹠も反映し損なった。

『日国』の【李広】（「中国前漢の武将。匈奴と戦い功績があり、武帝の時、北平太守となった。匈奴は恐れて飛将軍と呼び、その領地には進攻しようとしなかった。前一一九年没）、【蘇武】（「中国、前漢の名臣。字は子卿。武帝の時匈奴に使用して捕われ、一九年間抑留された。匈奴に降った李陵に降伏をすすめられたが、節を守り通した話は名高い。のち、雁に手紙を託し、故郷に帰ることができたところから、“雁〔かり〕の使い〔雁書〕”の故事がうまれた。〔前一一四〇頃～前六〇〕」）は、『広辞苑』の従来の欠落と直近の削除に対する補完と為り、私情を顧みず李の勧誘を断る事の特筆も意義が有る。

『広辞苑』の【雁つがいの使】（「〔漢書蘇武伝〕〔前漢の蘇武が匈奴に行き久しく囚われた時、蘇武を帰国させるために、“蘇武からの手紙が天子の射止めた雁の脚に結ばれていた”と使者に言わせて交渉したという故事から〕消息をもたらす使いの雁。転じて、おとずれ。たより。手紙。消息。雁書つがい」）は、【雁の便り/伝/文】も同義である。『日国』（〔漢書-蘇武伝〕の故事・喬知之-從軍行詩）引用も、多様な類語・用法（「かりのたまずさ。かりのつと。かりのふみ。かりがねの使い。《季・秋》」）を記す。『広辞苑』旧・新版の出典（『万葉集』八・九〔後者は『日国』の初出〕）は、愛用史の長さを物語る。

蘇武に纏わる中国の熟語は羊飼いに為り下がっても曲げない志を称える「蘇武牧羊」で、絵・音楽等の題材と為る（19世紀後半の画家任頤の『蘇武牧羊図』が有名。文学作品の出典は晚清四大譴責小説の内の『二十年目睹之怪現狀』（吳趸人、1903～10）〔他は李宝嘉著『官場現形記』、劉鶚著『老殘遊記』、曾朴著『孽海花』〕。『現漢』の【鴻雁】（「大雁」とも。鴻ひしこい、大雁おおかり）②（「〔文〕借りて書簡を指す」）、同義の【魚雁】の由来（〔古〕に魚の腹と雁の足で便りを寄せる言い伝えが有った）、用例（「類纂に魚・雁の便り〔書簡〕で通じる」「文通の往復」）からは、蘇武の事跡の由来が見られない。

『広辞苑』に於ける李陵・司馬遷の登場は、【中島敦】（「小説家。東京生れ。東大卒。漢学の素養を生かした端正な文章で、人間の存在のあり方を描出。作『光と風と夢』『山月記』『李陵』など。二〇〇〇年没）、【武田泰淳】（「小説家。東京生れ。東大中退。戦前の転向や中国での戦争・敗戦体験を根底とし、戦後派作家の代表の一人として活躍した。作『司馬遷』『審判』『風媒花』『快樂』『富士』など。二〇〇〇年没）も有る。異才中島の最高傑作『李陵』（短篇、遺作）の主役に司馬遷・蘇武も入り、同年（1943）刊の泰淳著評伝『司馬遷』も悠久な歴史を跨いだ巡り合せである。

『日国』の【李陵】（「〔日〕中国、前漢の武将。字は少卿。李広の孫。武帝の騎都尉として匈奴討伐の兵を率いたが、善戦空しく投降。匈奴の単于〔ぜんう〕はこれを壮として自分の娘をあたえ、右校王に任じた。匈奴にあること二〇余年で紀元前七四年に病没。〔日〕小説。中島敦作。昭和一八年〔一九四三〕

発表。中国漢代の武人、李陵・蘇武、李陵を弁護して宮刑に処せられた司馬遷らの性格を異にした生き方を鮮明に描くとともに、東洋思想と精神を追求」の様に、李陵は歿2千年余り後の日本で珠玉の同名小説（腹案の題は『漠北悲歌』）に由って再び異彩を放った。

小学館『日本大百科全書』（25巻、1984～89）と平凡社『世界大百科事典』（改訂新版、35巻、2007）の【李陵】でも、関連の特記が為された（「李陵の奮戦、降伏の悲劇は、詩や物語として中国人の間に長く伝えられた。日本では中島敦の『李陵』が有名」/「日本では中島敦の小説『李陵』によって親しまれている」）。両書の【司馬遷】は人物の項の下に武田泰淳作「評論文学の傑作」（前者の評）の項もあり、中国史上屈指の生存か毀滅かの極限選択（「極限状況」に擬えた造語）は、日本の作家の魂を揺さぶり本国以上の果実を結んだ（中国では李・司馬を描く作品の辞書立項は無い）。

【蘇武】の「節を守って降伏せず」の削除や【雁の使】の立項の様に、蘇武に対する日本人の関心の重点は中国人と異なる。日本文学史に残る『李陵』『司馬遷』は非業な仕打ちに遭った悲劇への惻隠を思わせ、『現漢』未収の「蚕室」（『広辞苑』＝「①蚕を飼養する室。かいこべや。〈圈春〉②中国で、宮刑を執行した獄舎の名。『日国』＝「①蚕を飼育する部屋。かいこべや。養蚕室。②古代中国で、宮刑に処すべき罪人を入れて燻腐した部屋、漢籍＝①「礼記－祭義」、②「漢書－司馬遷伝」「後漢書－光武紀」も、初出（「書言節考節用集 [1717]」）にも出る司馬への共感が滲む。

『漢大』の【蠶室】①（「古代の王室が蚕を飼養する宮中の館」）は初出が『日国』の①と同じで、②（「古代に宮刑を執行し又受刑者が居た獄舎」）の初出（『文選・司馬遷「報任少卿書」』）は【腐刑】の初出でもある。『日国』で【蚕室】の語釈に有るのに未立項の「燻腐」は『漢大』に【熏腐】が有り（「腐刑。古代の酷刑の1つ。腐刑は必ず煙火を使って回復させる [原文＝熏合之]、故に称する」、初出＝『旧五代史・晋書・李頌伝』）、元々養蚕用の加熱を施す密室に受刑者が創傷の感染を防ぐ目的で百日滞留する仕組みは、傷口に塩を塗る二次受刑の責め苦を味わわせる。

「人固有一死、或重於泰山、或輕於鴻毛」——「命は鴻毛よりも軽し」——
「命は義に縁りて軽し」——「命を鴻毛の軽きに比す」——「老三篇」

ハムレットの2択自問の漢訳中の「生・或・死」の字・義を含む司馬遷の名句は、『広辞苑』の【死は或いは泰山^{泰山}より重く或いは鴻毛^{鴻毛}より軽し】（「[司馬遷、任少卿に報ずる書] 人の生命はある場合にはみだりに捨てるべきではないが、ある場合には惜しまず捨てなければならない。それは義にかなうか否かの判断によるものである。泰山鴻毛。→命は鴻毛よりも軽し[“命”成句]」）、【泰山鴻毛】（「[司馬遷、任少卿に報ずる書“死は或いは泰山より重く、或いは鴻毛より軽し”] 命というものは、みだりに捨ててはならない時もあれば、進んで捨てなければならない時もある」）に見える。

【命は鴻毛^{鴻毛}よりも軽し】（「[司馬遷、任少卿に報ずる書“人固^{人固}より一死あり、死は或いは泰山より重く、或いは鴻毛より軽し、用の趣く所異なれば也”] [鴻毛はおおとりの羽毛で、甚だ軽いこと

から] 国家・君父などのためなら、いさぎよく一身を投げすてること(いう)は、上記2項の「泰山・鴻毛」「重・軽」の対の半分を強調し、前の【命は義に縁よりて軽し】(「[後漢書朱榮何伝論賛] 命も義にくらべれば、はるかに軽い。義のためには、命を捨てても惜しくない。命は義によって軽し」)【命は義によって軽し】=「“命は義に縁よりて軽し”に同じ)の祖形と言える。

『日国』所収の成句群は使用歴の古い順で、先ず【命は義によって軽し】(「かけがえのない命も義のためには少しも惜しくない。命[いのち]は義によりて軽し」, 初出=「十訓抄 [1252]」, 漢典=「後漢書-朱穆伝“情為_レ恩死, 命縁_レ義輕”」)が出て、次に【命は鴻毛より軽し】(「『文選』に見える司馬遷の『報任少卿書』に“人固有_一死_一。或重_二於泰山_一、或輕_二於鴻毛_一。用_レ之_レ所_レ趨異也”とあるところから出た語。鴻毛はオオトリの羽毛で、きわめて軽いものたえ) 命を捨てることは少しも惜しくないことをいう。同=「太平記 [14C 後]」)が現れた。

『広辞苑』未収の【死を鴻毛の軽きに比す】(「“鴻毛”はオオトリの羽毛で、非常に軽いものたえ) 国家・君主などのために一身をささげ、いさぎよく死ぬことをいう。いのちは鴻毛より軽し」, 初出=「浄瑠璃・鬼鹿毛無佐志鏡 [1710 頃]」)は、出現が遅く最後の例(「陸海軍軍人に下し賜はりたる勅諭-明治一五年 [1882] 一月四日“義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも軽しと覚悟せよ”)も一番遅い。【命は鴻毛より軽し】の最後の例(「春雨文庫 [1876-82] (松村春輔)」)も同じ頃であるが、前の第2点に司馬遷の作が引かれた(「本朝俚諺 [1715]」中の「史記云、燕丹言死輕_二於鴻毛_一」)。

【命は義よりて軽し】(「かけがえのない命も、正義のために捨てるのなら、惜しくなくなる。命[めい]は義によって軽し)は、同義成句項と同じ漢典しか付いていない。【死は或いは泰山より重く或いは鴻毛より軽し】(「『司馬遷-報任少卿書』の“人固有_一死_一。或重_二於泰山_一、或輕_二於鴻毛_一。用_レ之_レ所_レ趨異也”から) 死は、立派に死んだ時は重く、つまらないことで死んだ時は軽い)も、和文出典が無く未収の「泰山鴻毛」と同じく使用の痕跡は示されていない。この司馬語録の普及度は明らかに現代中国より低いが、『広辞苑』と違う解釈は中国の常識に一致する。

半世紀以来の人々の脳裡に刻み込まれた契機は、毛沢東の引用・敷衍(「人総是要死的, 但死的意義有不同。中国古時候有个文学家叫做司馬遷的說過:“人固有一死, 或重於泰山, 或輕於鴻毛。”為人民利益而死, 就比泰山還重; 替法西斯賣力, 替剝削人民和压迫人民的人去死, 就比鴻毛還輕。)[人は何れ死ぬのだ。但し死の意義には違いがある。昔、中国に司馬遷という文学者が居り、彼はこう言った。「人は固より一死有り、或いは泰山より重く、或いは鴻毛より軽し。」人民の利益の為に死ぬのなら、泰山よりも重い。ファシストの為に働き、人民を搾取し人民を压迫する連中の為に死ぬのなら、鴻毛よりも軽い。)である。

張思德(中央警衛団[連隊]の兵士, 29歳)を偲ぶ追悼会(1944.9.8)で述べた『為人民服務』(人民に奉仕する)は、「文化大革命」(66~76)前期の毛著述學習熱で「老三篇」(古典的3篇)の筆頭(次は「愚公移山」[愚公山を移す。45.6.11]、『記念白求恩』[ベチューンを記念する。39.12.21])とされた。発行数が『聖書』に次ぐ史上2位の『毛主席語録』(中国人民解放軍総政治部編, 1964)に入ったこの1節は、強制された「6億(学齡前層を除く国民数)総暗誦」(戦後日本の「一

億総懺悔/白痴」を振った造語)に由って、最も知られる弔辞の表題の名言と為った。

『広辞苑』の【泰山・岱山】(「太山」とも書く)① [Tai Shan] 中国の名山。山東省泰安市の北方にあり、五岳中の東岳。古来、天子がここで封禪^{ほうぜん}の儀式を行なった。また、死者の集まる山ともいわれ、仏典では地獄のことを太山と呼ぶこともある。標高一五三三^{メートル}。世界遺産)に対し、人名・地名を採らない『現漢』の【泰山】① (「Tài Shān」古人が泰山[山の名、山東に在る]を高い山の代表とし、多く敬慕される人と重大な、価値が有る物事に譬える。「泰山北斗」「泰山より重い」「目が有るのに泰山を識別できない[見識が狭く眼前の有名人が分らぬ比喩]」)は、仏教の暗い意味との同居が無い。

『広辞苑』の【鴻毛】(「鴻^{ほう}の羽毛。きわめて軽いことのたとえ。“身を一の軽きに致す”)は、高橋是清(明治末～昭和初の財政家・政治家)の国家危急時の心得として知られる成句の項が無く、【身を泰山の安きに置く】(「泰山のようにどっしりと安定したものにする。ゆるぎなく危なげのないものとする)と共に、『日国』に入らず来歴が未詳である。『現漢』の【鴻毛】(「^{おおとり}鴻雁の羽毛、軽微な、或いは取るに足らない物事の比喩)の例文(「死有重於泰山、有軽於～」「死は泰山より重いのも有り、鴻毛より軽いのも有る)は、司馬遷・毛沢東の用法に基づいて無価値の意を明示する。

泰(山北)斗・北斗七星——五岳・三山・三神山——「三江・五湖三江・三江五湖・三江七沢」

「泰山北斗」(『現漢』=「高い徳・声望を持つ、或いは卓越した業績を有する事で、皆に敬慕される人の比喩。『広辞苑』=「泰山と北斗七星。転じて、その道で最も世に仰ぎ尊ばれる人。泰斗」、『日国』=「新唐書-韓愈伝賛)は、両言語通用の和製漢語「泰斗」を派生した(『広辞苑』=「泰山や北斗のように」その道で世人から最も仰ぎ尊ばれている権威者)、『日国』の初出=「黄葉夕陽邨舍詩-前編 [1812]」。『現漢』=「泰山北斗。“京劇の泰斗”“彼は音楽界の泰斗に^{かぶ}算え得る”)。天地2極の雄偉・崇高な景観の代表格の五岳中の泰山と北斗七星は、又5・7の神秘数の組み合わせである。

「五岳」(『現漢』=「東岳の泰山・西岳の華山・南岳の衡山・北岳の恒山と中岳の嵩山を指す。我が国の歴史上の五大名山。『広辞苑』=「中国の信仰上の五つの霊山。戦国時代、五行思想の影響により生じ、泰山[東岳]・衡山[南岳]・華山[西岳]・恒山[北岳]・嵩山[中岳]をいう。『日国』の【五岳・五嶽】□=「中国で古来、国の鎮めとして崇拜された五つの霊山。五行思想の影響によるもの。泰山[東岳・山東省]、華山[西岳・陝西省]、衡山[南岳・湖南省]、恒山[北岳・山西省]、嵩山[中岳・河南省]をいう。漢典=「礼記-王制)は、東西・南北の2対+中の枠組みに五行思想の霊妙が現れる。

北天で斗^{ひしゃく}状に並ぶ北斗七星は斗の柄に当る第7星(搖光)の指す方向が時を知らせ、第1・2星(天數・天璇)を結ぶ線は延長に北極星^{しるし}が在り真北の方向を探す徴と為る。北辰(『現漢』=「古書で北極星を指した。“衆星が北辰^{めく}を環る”)。『広辞苑』=「[北天の星辰の意]北極星。また、北斗七星のこと。帝居または天子のたとえ)を用いた孔子の命題(「為政以德、譬如北辰居其所、

而衆星共之」[政を為すに徳を以てすれば、譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之これに共くが如し]は、北斗星が北極星へ向う構図の7→1の昇華を示唆する。

「五岳/嶽」の初出（『凌雲集』[814]九月九日侍宴神泉苑各賦一物得秋山〈菅原清公〉“三山漂渺瀛外。五嶽嵯峨赤暎中”）に、「三山」（『日国』の㊦㊧中国で三つの仙山、蓬萊、方丈、瀛洲の総称。三神山）が使われた。その初出（『本朝文粹』[1060頃]一〇・落葉声如雨詩序〈慶滋保胤〉“嗟呼三山与三五天。不知又不知”）は、欠落の漢典（【方壺】[“ほうじょう〈方丈〉㊦”に同じ]）に有る「拾遺記-卷一-高辛“三壺則海中三山也。一曰方壺。則方丈也。二曰蓬壺。則蓬萊也。三曰瀛壺。則瀛洲也。形如壺器”）より遅いが、「五天」（㊦㊧「東・西・南・北・中央の天。大空」）との対が興味深い。

【方丈】㊦（「三神山の一つ。中国で、東方海上にある神仙が住んでいるとされた想像上の山。方壺[ほうこ]、漢典=「史記-秦始皇本紀“海中有三神山、名曰蓬萊方丈瀛洲、僊人居之”」）を含む「三神山」は、当該項の㊧（「中国の伝説で、東方絶海の中央にあつて仙人が住むという蓬萊[ほうらい]・方丈・瀛洲[えいしゅう]の三つの山の称。三島。三壺山」、漢典=「*史記-封禪書“此三神山、其伝在渤海中” *漢書-郊祀志“蓬萊・方丈・瀛洲三神山在渤海者、其伝在渤海中、〈略〉金銀為宮闕”」）に、『広辞苑』の②（「日本で、富士・熊野・熱田の三山。祝賀の画題とする」）と同義の㊦も有る。

【三山】㊦㊧（「三つの山。特に、天香久山、畝傍山、耳成山の“大和三山”をさす。また、月山、羽黒山、湯殿山の“出羽三山”、熊野本宮、新宮、熊野那智大社の“熊野三山”をもいう）は、『広辞苑』の①（「三つの山。⑦大和三山、すなわち畝傍山・香具山・耳成山。⑧熊野三山、すなわち熊野三社。“一巡礼”⑨出羽三山、すなわち月山・湯殿山・羽黒山）では順番・名称が少し違うが、両国共通の三神山の神格性を一部持つ歴史的・文化的な由緒が有る景観である。一方、『日国』の㊦㊧（「中国江蘇江寧県、揚子江に臨んで連なる三峰の総称」）は中国の類書より詳しい。

「三江」は漢籍初出（『書経禹貢』の「三江既入、震沢底定」[三江既に入り、震沢底定す]）に就いて、古代に複数の解釈が有る（『国語・越語上』韋昭注では震沢[太湖の古称] 一帯の呉江・錢塘江・浦陽江、『水経注沔水』所載郭璞説では岷江・松江・浙江、陸徳明注では松江・婁江・東江、『漢書地理志』顔師古注では北江・中江・南江とした）。江南中心の各地の水道の総称は清代に西・北へと広がり（李慈銘が四川の岷江・涪江・沱江、黄遵憲が広東の西江・北江・東江、阮葵生が東北の鴨緑江・松花江・黒龍江とした）、更に様々な説（華中～西南の贛江・漢江・岷江等）も併存する。

『日国』の㊦㊧（揚子江・溧水・呉淞江の総称）、㊦（松江[呉淞江]及び支流2つを合せた総称）は、俱に漢典が無いが江南の2組を示す。語源中の「震沢」は『日国』にも無いが、柳川震沢（1650～90、儒者）の漢風名に中国最古の經典の影響が窺える。㊦の出典（菅原清公「奉和-清涼殿画壁山水歌」の「三江森々尋問近、五岳迢々大裏生」）と同じ『経国集』（良岑安世等が827年に撰進した勅撰漢詩文集、日本初の詩文総集）巻第十四に、唱和の元と為る詩で「三江」が先に使われた（太上天皇[在祚]『清涼殿画壁山水歌』の「蓬萊方丈望悠哉。五湖三江情汭河」）。

「五湖三江」は立派な作例が有るのに、類義の「三江五湖」（『漢大』=「①東南部の3つの江[大

河]と太湖一帯の湖を指す。②江河・湖・海の汎称, 其々「《淮南子・本經訓》:“舜乃使禹疏三江五湖”」[下線は人名・地名・時代の記号]等4点, 「《尸子》卷下:“取玉甚難, 越三江五湖, 至昆侖之山, 千人往, 百人反; 百人往, 十人反”」等3点の出典有り), 『漢大』の【三江】の次の【三江七澤】(「広く江河・湖を指す」, 出典 = 「唐李白《当塗趙炎少府粉罔山水歌》:“洞庭瀟湘意渺綿, 三江七澤情洄沿。”宋陸游《書懷絕句》:“未駕青鸞返帝鄉, 三江七澤路茫茫”」)と共に, 『日国』には入っていない。

姿・色端麗の美禽群 (孔雀・鴛鴦・青鸞・丹頂・鶴・白鳥) ——西洋 / 日本 / 中国人の動 / 植 / 鉱物的な特質 —— 「鸞鳳」と「鑾鈴」

陸游詩の中の「青鸞」は, 『広辞苑』『日国』(「キジ目キジ科の鳥。鶏より大きく, 羽色は大体褐色で, 翼には多く環状紋があり, 美麗。雄の尾羽は約一・五尺。マレー半島・スマトラ・ボルネオに産」/ 「キジ科の鳥。雄は全長約一八〇センチ, うち尾長は約一三〇センチ。形はクジャクに似ており, 長い二枚の中央尾羽が目立つ。顔・くびは青く, 羽色は褐色の地に黒や淡褐色の細かい斑点があり, 翼に眼状紋が多数並ぶ。マレー半島, スマトラ, ボルネオなどの密林にすむ。翼・尾羽は茶の湯の羽箆として珍重される。学名はArgusianus argus)で, 美形が讃えられ茶会の道具に用いる使途が特筆される。

『広辞苑』の实在の鳥類に対する美の評価は, 【孔雀】【鴛鴦】【青鸞】【丹頂】の「羽が極めて美麗」「冬から春の雄は特に美しく」「美麗」「大形で美しい」に見える。『日国』では【鶴】【丹頂】【鴛鴦】の「美しい体型」「姿が美しい」「雄は美しく」に限り, 【孔雀】【青鸞】は特に賛辞が無い。型破りな語釈で名高い『新明解国語辞典』(編集主幹 = 山田忠雄, 1972~。以下『新明解』)の判定は, 【鴛鴦】の「色が非常に美しい」が最高で, ^{ワン・ランク}1 段下に【丹頂】【白鳥】【孔雀】の「形態優美」「姿が美しい」「美しい尾羽」が並ぶ(「青鸞」は規模の制限で不採録)。

大・中・小型国語辞典のNo.1はこの分野で丹頂を除いて審美眼が一致せず, 「国民辞書」の見方も編者の感性が交じるから国民的な合意に等しい訳ではない。『現漢』では唯一【孔雀】に「雄の尾の羽はとても長く, 色彩絢爛(原文 = “顔色絢爛”)」と有り, 『漢大』の同項は雄の上尾筒の羽を拡げる時の彩色の扇状が殊に艶麗だ(同 = 「開屏時如彩扇, 尤為艶麗」と称える。【鴛鴦】の「雄の羽は色が鮮麗 (= 「絢麗」)」に続く「我が国の著名な特産珍禽の一種」は, 日本でも金・銀賞級の賛美を浴びた美禽に対する別格扱いの理由の一端を語る。

『論語郷党』の「厩焚。子退朝, 曰:“傷人乎?”不問馬。」(厩焚けたり。子朝より退きて, 曰く, 「人を傷えり乎。」馬を問わず)の様に, 中国では儒教も唱えた人間本位の思考・行動様式が強く, 生活に精一杯な状況が多い中で動植物や景観への関心が薄い。西洋/日本人の肉/菜食系的な気質を「動/植物的」に譬えるなら, 中国人は鉱物的な堅/固/硬さを身上とする処が有る。日本文学には『城崎にて』(「小説の神様」志賀直哉の短篇, 1917)の様な小動物への観察・密着が多いが, 中国では人間以下と見られ勝ちな動物への感情移入は一般的に難い。

日本語の「鸞」（『広辞苑』＝「①鸞鳥に同じ。②中国で、天子の馬車の軛^びまたは旗などに飾りとして付けた鈴。鸞鳥の声が和するのにかたどったものという」）、【鸞鳥】は「中国の想像上の鳥。鶏に似て、羽の色は赤色に五色を交え、声は五音に合うと伝えられる。鸞。『日国』＝「①“らんちょう【鸞鳥】”に同じ。②【“鑾”とも】中国で天子の馬車を引く馬のくつわや天子の旗などにつけた鈴。鸞鳥の和する声に擬したもの、【鸞鳥】は「中国での想像上の鳥。形は鶏に似て、羽の色は赤色に種々の色をまじえ、声は五音にあたるという。鸞[らん]」の両義中、後者は『現漢』で同音(luán)異字の「鑾」と為る。

「鸞」は『広辞苑』の①に818年の用例（「文華秀麗集“庭前舞を見れば一は常に顧み”」）が付き、『日国』の①の初出（「延喜式[927]二一・治部省“祥瑞〈略〉鸞。状如翟。五綵以文”」）と共に歴史が古い。②は漢典（「詩経-小雅・蓼蕭“既見君子，儻革冲冲，和鑾離離，万福攸同”」）で「鸞」に作るが、初出（「色葉字類抄[1177-81]“鑾ラン〈略〉大鈴”」）の表記は、ㄩの部首（漢典＝「説文解字-四篇上・鳥部」）と異なる。『現漢』の【鑾】の①②（「鈴」「皇帝の馬車に鸞鈴が有り、転じて皇帝の馬車を指す」）は、鈴や天子の威風に相応しい金偏で鉉物的な堅固さを感じさせる。

『広辞苑』『日国』に無い【鑾】は、【鑾駕】（「皇帝の馬車」）、【鑾鈴】（「昔の馬車に付けた鈴」）、【鑾輿】（「鸞駕に同じ」）の3項が有る。『広辞苑』の【鸞駕】（「天子の乗物」）、【鸞輿】（「“鸞”は鈴。それを飾りとしてつけたのでいう】天子の輿。鳳輦）は、中国語の金偏好みと逆の傾向（例＝「店舗⇔店舗」）を現す様に鳥類に入る。尤も、「鳳輦」（『広辞苑』＝「①屋形の上に金銅の鳳凰をつけた輿。即位・大嘗会^{ひつぎ}など晴の儀式の行幸に際しての天皇の乗物。鸞輿^{らん}。鳳輿。②天皇の乗物の美称。『日国』の漢典＝「旧唐書-楽章」）は、神鳥に金の装飾を施す物で「鑾」と通じる。

『現漢』では【鸞】の語釈（「伝説中の鳳凰の類の鳥」）、2項中の【鸞鳳】（「〈書〉夫婦の比喩。用例2点」と【鸞儔】（同）の用例2点目の「～鳳侶」（愛情が深く素敵な夫婦）に、未収の「鳳輦」の「鳳」が出る。日本語にも前者は有る（『広辞苑』の【鸞鳳】＝「[ランホウとも】鸞鳥と鳳凰^{ほうおう}。君子のたとえ。また、同志の友、夫婦の契りなどにもいう。『日国』の【鸞鳳】＝「[ランボウとも】鸞鳥と鳳凰。ともにめでたい鳥の名。君子などにたとえていう。また、同志の友または夫婦の契りなどにもいう」、漢典は「漢書-劉陶伝」）が、中国語の転義は鳳凰や鴛鴦の同じ両性結合の対に拠る。

『現漢』の【鳳凰】（「古代伝説中の百鳥の王。羽毛美麗。雄は鳳と言い、雌は凰と言う。多く瑞祥の象徴に用いる」）は、【孔雀】の「絢麗」と並ぶ言葉で実存・架空の各1鳥の美形特記の対を成す。『広辞苑』（「古来中国で、麒麟^{きりん}・亀・竜と共に四瑞として尊ばれた想像上の瑞鳥。形は前は麒麟、後は鹿、頸は蛇、尾は魚、背は亀、頷^{あご}は燕、嘴は鶏に似、五色絢爛^{けんらん}、声は五音にあたり、梧桐に宿り、竹実を食い、醴泉^{れいせん}を飲むという。聖徳の天子の兆として現れると伝え、雄を鳳、雌を凰という。鳳鳥」）も、【孔雀】に次ぎ【青鸞】【丹頂】に勝る「絢爛」で称え、「四瑞・五色/音」にも言及する。

瑞鳥・靈獸——四靈の麟・鳳・亀・龍——「鳳毛麟角」——「龍鳳呈祥」——
「龍飛鳳舞」——「龍鳳胎」——「龍生九子/種」

「瑞鳥」(『広辞苑』 = 「めでたい鳥。鶴や鳳凰の類。『日国』 = 「めでたい鳥。吉兆とされる鳥。古く、鳳凰、白雉、朱雀、白鷹などが祥瑞とされた」、漢典 = 「宋之問 - 奉和幸三会寺应制詩」) は、両国で数多い種類を指す諸説が有る(『日国』の【**區區**】に拠ると、中国では漢～六朝時代に祥瑞の記録の累積が見られ、最も良く纏めた『宋書符瑞志』に記されるのは鳳凰・神鳥・比翼鳥・赤雀 [以下 24 種略] 等であり、日本では勅撰の史書に多くの記録が有り、『日本書紀』『続日本紀』には赤鳥等 14・8 種、『延喜式二一・治部省』に挙げられた「祥瑞」鳥は大瑞 [鳳・鸞・比翼鳥・同心鳥・永楽鳥] と上 / 中 / 下瑞各 6・12・4 種)。

日本語には同じ美称を冠する「瑞獸」は無く、2 字とも対を成す「靈獸」が有る(『広辞苑』 = 「尊く不思議なけもの。祥瑞の獸。麒麟などの類。『日国』 = 「靈妙なけだもの。尊く不可思議なけもの。瑞祥とされるけもの。麒麟 [きりん] などをいう」、漢典 = 「蔡邕 - 麟頌」)。面白い事に、日本語の「瑞鳥」の初出(『続日本紀 - 延暦四年 [785] 五月癸丑 “先是。皇后宮赤雀見 (略) 孫氏瑞應凶日。赤雀者瑞鳥也”)で、『延喜式』格付けの上瑞 7 種中最下位の赤雀が登場し、「靈獸」第 1 号(「名語記 [1275] 五 “狐は三国の靈獸とて”)も、語源の表現対象の麟の王者級と懸け離れる。

『広辞苑』の【**竜**】①(「想像上の動物。たつ」)の④(「中国で、神靈視される鱗虫の長。鳳^{ほう}・鱗^{りん}・亀^きとともに四瑞の一つ。よく雲を起こし雨を呼ぶという」)に、【**鳳凰**】の冒頭(「古来中国で、麒麟^{きりん}・亀^き・竜と共に四瑞として尊ばれた想像上の瑞鳥」)と同じ「四瑞」が出る。『日国』『漢大』にも無いその来歴不明の総称は、両言語共有の「四靈」(『日国』 = 「四種の靈物。四種の靈妙な生物。すなわち麟、鳳、亀、龍」、初出 = 「続日本紀 - 承和一五年 [848] 六月丁酉 “謂之四靈、百王之所同貴、”」、漢典 = 「礼記 - 礼運 “何謂四靈、麟・鳳・亀・龍、謂之四靈、”」)が普通である。

両辞書の列挙(鳳 [鳳]・[麒麟] 麟・亀・龍 / 麟・鳳・亀・龍)は其々瑞鳥と靈獸の代表を首席に据え、『礼記』由来の「四靈」の筆頭は麒麟(『広辞苑』の① = 「[雄を“麒麟”，雌を“麟”という] 中国で聖人が出る前に現れるという想像上の動物。形は鹿に似て大きく、尾は牛に、蹄は馬に似、背毛は五彩で毛は黄色。頭に肉に包まれた角がある。生草を踏まず生物を食わないという。一角獸。『日国』の【**麒麟**・麒麟】の①に「額は狼 [おおかみ] に似ており」と有り、初出 = 「書紀 [720] 白雉元年二月 “所謂鳳凰・麒麟・白雉・白鳥、(略) 皆是れ、天地の生ず休祥嘉瑞なり”」、漢典は「礼記 - 礼運」)である。

『広辞苑』の②(「最も傑出した人物のたとえ」)は、『日国』で③(「きりんじ [麒麟児] ”の略」、漢典 = 「晉書 - 顧和伝」)と為る(【**麒麟児**】は「才知の特にすぐれた少年。寧馨児^{ねいけいじ}」 / 「麒麟の子の意」才知、技芸に特にすぐれた年若い者。神童。寧馨児 [ねいけいじ]。きりん、漢典 = 「杜甫 - 和江陵宋大少府詩」)。【**麒麟**・麒麟】②(「一日に千里も走るというほど、よく走るすばらしい馬。駿馬 [しゅんめ]。名馬」)も漢典(「韓愈 - 雜詩」)に拠るが、両国で何時からか死語化した。「麒麟児」は日本語入り(初出 = 「水流雲在楼集 [1854]」)後に今も使われるが、中国では共産党時代に消えた。

『現漢』の親字【**麒**】(「①下 [の項] を見よ。② [Qí] 罔姓氏の一つ」)の唯一の項【**麒麟**】(「古代伝説中の動物の一種。体形は鹿に似ており、頭に角が有り、全身に鱗と甲羅^{こうら}が有り、尾が有る。古人

はこれを以て祥瑞の象徴とした。略称“麟”)は、【麟】(「書」麒麟)の用例「鳳毛～角」(当該項 = 「稀少で貴ぶ可き人或いは物事の比喩」, 唯1項の【麟鳳龜龍】(「古代に麟鳳龜龍を四霊と称し, 転じて人徳が高尚な人に譬える)に見る声価の割には, 【鳳凰】の「百鳥之王」や【鳳】①(「鳳凰。龍～| 鸞～| 百鳥朝～」)の4字熟語(百鳥鳳に朝う)と比べて, 衆を凌駕する威風に遜色が有る。

「鸞鳳」の前の併称は「百鳥朝鳳」と同じ未収熟語の「龍鳳呈祥」(龍鳳祥瑞を呈す)の様に, 四霊中の最も尊ばれる両者の組み合わせである。「麟鳳龜龍」の最後の方は『現漢』の①(「我が国の古代伝説中の神異な動物。体が長く, 鱗が有り, 角が有り, 脚が有る。歩け, 飛べ, 泳げ, 雲を起し雨を降らす事が出来る」), ②(「封建時代に龍を帝王の象徴とし, 帝王が使う物をも指した」)[「龍顔」等用例4点]の通り, 君主の超絶の権勢の権化に用いた語義と相俟って, 鳥類の先祖に当る恐竜の字面に合う「恐懼・畏敬す当き龍」の感が強い。

【龍】の36項は【鳳・凰】(10・0), 【龜】(8), 【麒・麟】(各1)の合計の1.8倍も有り, 4字熟語の10項は他の3種・5親字の2項(「麟鳳龜龍」「鳳毛麟角」)の5倍に当る。四霊が冒頭に出る4字熟語の内の含有率も「龍」が断然首位(91.7%)で, 「鳳」(3)が「龜」(1)に大差を付け「麟」(2)をも超えるのは, 【龍飛鳳舞】(山々が延々と連なる雄大な様, 又, 書法の筆勢が伸びやかに躍動する様の形容)が有る為である。氣勢壯観や生動活発に譬える「龍が飛び鳳が舞う」形象は, 足元の虫や植物も踏まぬ麒麟に対する両者の奔放な故の優位を思わせる。

日本語の「龍鳳」(「日国」=「龍と鳳凰[ほうおう]。また, すぐれた人物のたとえ。りゅうほう」, 初出=「懐風藻[751]〈藤原宇合〉」, 漢典=「魏志-管寧伝」)は, 帝国海軍の瑞鳳型航空母艦(1942年改造完成)の名に用いられたが, 敗戦に伴う自沈・解体(45.11)後は廢れた。中国では「人中龍鳳」(龍鳳の様な抜群の偉才), 「龍鳳餅」(結納を交す際に新郎側が新婦側に贈る菓子, 龍と鳳凰の図案と「囍」[「双喜」即ち二重/双方の喜びの意]の文字で飾られ, 別称「喜餅」), 『現漢』第6版(2012)増補の【龍鳳胎】(「1男1女の双生児を指す」)等の様に好く使われる。

『現漢』初版刊行(1978.12)直後の改革・開放元年に独り子政策が国策として実施され, 漢族に対する厳格な産児制限の下で双子は特例の戸籍が取れるから有り難がられ, 取り分け男女1対の場合は複数・2種の獲得の「ダブル・ラッキー」で憧憬・羨望の対象と為る。美称「龍鳳胎」の靈獸・瑞鳥は皇帝・皇后の意も有り, 「影帝/后」(「映画祭[原文=“電影節”]で最優秀男/女優の称号を獲った人を指す」)の名誉と合せて, 現実の君主夫妻に当て嵌る事で想像上の龍・鳳凰の至高の神威が感じられ, 鳳凰の略の「鳳」が雄なのに后に当る矛盾を感じる。

初版の【龍生九子】(「古代の伝説で, 1頭の龍が生んだ9頭の小さい龍は, 姿も性格も其々異なる。同胞・兄弟の志向に相違が有り, 別に同じでない事の比喩。龍生九種とも言う」)と同義の【龍生九種】(第6版新設)は, 1子限定の中で9子出産どころか兄弟も成立しないので意義が半減する。「小皇帝」(同, 「甘やかされて育ち, 家で行き放題の子供」)量産の中の【龍鳳胎】【龍生九子/種】は, 当局が強制墮胎を辞さぬ時世にも消えない子孫繁栄の願望を覗かせる。「龍的伝人」(龍

の後裔) を自称する中国人は斯くして、中華民族・文化の象徴と為る龍を敬って已まない。

「龍+虎/馬」熟語群——「龍口」と「虎口」——百獣の王と「無冕之王」——
「獅子大開口」と「獅子身中(の)虫」——石獣の首位——「龍生龍，鳳生鳳」

他の動物と対を成す4字熟語は「龍+虎」が最も多く(【龍盤虎踞】[龍が^{とくろ}峙を^{うずくま}巻き虎が^{うずくま}蹲る。地勢の險要の形容。【虎踞龍盤】が主項目、【龍潭虎穴】[龍が棲む深淵、虎が身を隠す巢穴。危険な境地の形容。“虎穴龍潭”とも]、【龍騰虎躍】[龍の様に飛び上がり、虎の様に跳ね上がる。威武・雄壯、大活躍な様の形容。“虎躍龍騰”とも]、【龍争虎鬪】[龍と虎が鬪う。双方の実力が拮抗し鬪争が激しい様の形容])、もう1項は【龍馬精神】(「唐代李郢《上裴晋公書》：“四朝憂国鬢如絲，龍馬精神海鶴姿。”[龍馬=伝説中の龍に似ている駿馬]後に転じて健壯・旺盛な精神を指す)である。

【龍口奪食】(「降雨が頻繁な季節に作物の収穫を急ぐ事を指す[龍口=転じて大雨を指す]。龍口奪糧とも言う)と同義の【龍口奪糧】は、【虎】の31項中の【虎踞龍盤】【虎踞龍蟠】(同音・同義)の次の【虎口】¹(「危険な境地の比喩。“虎口から危険を脱する”“虎口を逃れる”)、4字熟語項【虎口拔牙】(「非常に危険な事をする比喩)、『虎口余生】(「大難を経て僥倖に生命を保全した比喩)と関連する。龍は降水の大本(故に和製漢語「蛇口」に当る中国語は「水龍頭)だから、雨期の刈り入れの強行は龍の口から食糧を奪う事に譬え、虎口から牙を抜く冒険と同じ挑戦の意を持つ。

日本語には「虎口」(『広辞苑』=「[虎の口の意]きわめて危険なところ」、『日国』の漢典=「莊子-盗跖)と共に、和製漢語「虎口の讒言」(「人を陥れるためにする告げ口」, 出典=『平家物語』)、『虎口の難』(「非常に危険な難儀」, 同=『太平記』)、『虎口を逃れて竜穴に入る』(「一つの難を逃れてさらに他の難儀に逢うことのとえ)も有るが、中国で「~奪食/糧」の熟語(『漢大』未収、[20世紀後半の新語か)を生んだ「龍口」は無い。日本語にも「竜虎」が有る(「[リョウコ]①たつとら。②力量が伯仲した二人の強者のたとえ)が、「虎口」と対を成す「竜口」の派生は無い。

「竜虎相搏つ」(「実力の伯仲した強豪同士が相対してたたかう。『日国』に出典無し)は、「龍争虎鬪」(『漢大』の初出=「元馬致遠《漢宮秋》)と一緒にある。『現漢』の3字複合語【龍虎榜】(「排行榜[等級付け]を指す。【排行榜】=「公表された、ある統計の結果に基づく順位を排列する名簿。“流行歌番付”“国内自動車売上げ順位”)も、天上の至高の靈獣と地上の最強級の猛獣で強豪や好成績の上位陣一覧を命名する物である。【虎】の②③(「比喩に用い、勇猛・威武を形容する」[<方> 凶悪な相貌を現す)は、『広辞苑』の同②(「俗に、酔っぱらい)と対照的である。

『日国』の【百獣】(「多くのけもの。すべての獣」, 漢典=「書経-舜典“於予撃石拊石, 百獸率舞”)の初出(「三代実録-元慶六年[882]正月七日“臣等追率舞於百獸-, 非驚華磬之声-」)に対し、【百獣】(「“はく”は“百”の漢音 多くのけもの。ひやくじゅう)は猛虎の登場で始まった(「高野本平家[13C前]——「猛虎深山にある時は、百獣[ハクシウ]ふるひおづ)。『広辞苑』の【百獣】

（多くのけもの。すべてのけだもの。“一の王ライオン”）は虎以上の強者を挙げ、『日国』の【百獣の王】（「百獣のうち最強で、他に匹敵するものがないもの。獅子をいう。ライオン」）も獅子を推す。

この派生語（初出＝「今弁慶 [1891] 〈江見水蔭〉」）は、7世紀以上も昔の漢籍に出た（『漢大』の【百獣王】の初出＝「宋趙令時《候鯖録》卷八“張文潜戯作《雪獅絶句》云：‘六出装來百獸王，日頭出後便郎當。’」）。【獸王】（「獣の中の王にあたるもの。獅子[しし]をいう」）の初出（「百丈清規抄[1462]四“獅子は、獸王ぢゃほどに”」）の通り、「獸王＝獅子」の評価は中世に既に現れた。「獸王」未収の『広辞苑』『現漢』も共通認識を掲げる（「ライオン [lion]」の「百獣の王といわれる」/【獅子】の「獸王」の称が有る）が、虎は中国では百獣の「無冕之王」（無冠の帝王）の称に値する。

『広辞苑』の【虎】成句の7/10は中国の「虎」熟語と通じ（「虎に翼」→「如虎添翼」，「虎の威を借る狐」→「狐假虎威」，「虎の尾を踏む」→「履虎尾」，「虎は死して皮を留め，人は死して名を残す」→「虎死留皮，人死留名」，「虎を画いて狗に類す」→「画虎類狗/犬」，「虎を野に放つ」→「放虎帰山」，「虎を養いて自ら患を遺す」→「養虎遺患」），【獅子・師子】の同7項中2項だけ有る（「獅子は兎を撃つに全力を用う」→「獅子搏兔 [亦用全力]」，「獅子身中 [の] 虫」）。『現漢』の【獅】の6項中の熟語は、前者と【獅子大開口】（高値を吹っ掛ける，又は籠棒に高い物質的要求を出す比喩）しか無い。

『日国』の【ライオン】は初出（「今弁慶 [1891] 〈江見水蔭〉——“其物は、思ひもよらぬ獅子 [ライオン] なり”）が【百獣の王】（「百獣の王とて今少しく強かるべきに」）と同じで、関連の解説が『現漢』と一緒にある（「百獣の王と呼ばれ，その咆哮 [ほうこう] の声はすさまじい」/「吼声很大 [咆哮の声はとても大きい]，有“獸王”之称」）。中国の熟語の少なさはアフリカ～インドに分布し実感し難い事も要因で，大きく口を開ける姿で利得を貪る強欲を表す比喩（『漢大』の初出＝李伯元著長篇小説『文明小史』[1903～05] 第5回）は，中国的な「猛獸＝貪婪」の連想の所産である。

「獅子身中の虫」（『広辞苑』＝「梵網經」[獅子の身中にすんで，これの恩恵を蒙っている虫が，かえって獅子の肉を食ってこれに害毒を与える意] 仏徒でありながら仏法に害をなすものたとえ。また，内部にいて恩恵をうけながら，害をなすものたとえ。『日国』の初出＝「法然消息文 [1212頃]」）は，中国では只『漢大』に残っている（「仏教語。内部から仏法を破壊する僧団中の変節者。後に亦革命の陣営に紛れ込んだ日和見主義者を指す」，仏典＝『蓮華面經』卷上，初出＝魯迅『集外集・《奔流》編校後記 [十二]』。略語「獅虫」も併記，用例＝陳毅『滿江紅・游広東旋至海南島度假一周記沿途所見 詞之四』）。

『日国』の【獅子・師子】の語誌(1)(2)の記述（「中国・日本にライオンは生息しないので，獅子の概念は，西方からのものと考えられ，日本では空想上の動物であった」，「百獣の王として王者の象徴と考え，仏教では人の王である仏の象徴とした」），【一身中の虫】と由来の【一身中の虫獅子を食う】（語源＝「『梵網經-下』『仁王經-囑第八』の“如師子身中虫，自食師子肉-”」，初出＝「吾妻鏡-文治二年 [1186]」）の様に，和製「獅子」関連語は仏典の影響が強く精神的な要素が多いが，魯迅（文学者・翻訳家）の著述（1935）が成句の初出と為るのは中国語の受容の遅さを示す。

『広辞苑』の【獅子は兎を撃つに全力を用う】（「簡単そうに思えることにも油断することな

く全力を尽くすとえ)は、『日国』の【獅子・師子】の熟語20項には無く来歴が不明である。『広辞苑』未収の類義成句【一小虫を食わんとてままず勢いをなす】(「獅子は小虫のような弱い獲物をとらえるときも、力を抜かずに全力で向かうの意」すぐれた人は、どんなことにでも、少しの油断もなく、細心の注意をはらい、最善を尽くして行なうというたとえ)、初出=「車屋本謡曲・石橋 [1465 頃]」は、又もや中国で馴染の薄い仏教縁の「獅子・虫」の対に拘る。

『現漢』の【獅子搏兔】(「小さい事に対しても全部の力を出し、些かも軽視しない比喻[“搏”=飛び掛って捉える])は、陸象山(南宋の大儒)の「獅子捉兔捉象、皆用全力」(獅子は兔を捉えるにも象を捉えるにも、皆全力を用う)から来た(『陸九淵集・卷三十五・語録下』)が、『漢大』の【獅子搏兔、亦用全力】(獅子は兔を搏つに亦全力を用う)は出典が無い。【獅象搏兔、皆用全力】(出典=「清黄宗羲《〈称心寺志〉序》」)の附記(「亦作“獅子搏兔、亦用全力”」)に現代の例(「茅盾《謹嚴第一》」)が付くが、獅子対兔・象の搏闘も獅子・象対兔の捕捉も中国人好みの規模の対である。

「石獸」(『広辞苑』=「中国の帝王など貴人の墳墓、宮殿・祠廟などの前を飾った獸形の石像。漢代に始まり、朝鮮にも波及。『日国』=「中国の帝王・貴人の墓、祖廟、宮殿などの前に守護、裝飾として造り設けた獸形の大きな石像。獅子、牛、馬、虎などがある。六朝時代から唐・宋代にかけて盛んであった」)、「石人石獸」(『日国』=「古代中国、漢代以降墓廟の前に配した石製の彫刻物。文人・武人などの人物、獅子・馬などの獸形。唐太宗陵の六駿は最も優れたもの。宋・明・清の陵にもあり、新羅統一時代以後の朝鮮でも用いた」)の内、獅子(1対が定番)は(天)馬・虎・駝鳥・牛・豚より格上の首位に当る。

「石人石馬」(『広辞苑』=「前方後円墳の墳丘上ならびに周辺に置いた石造彫刻。人・馬のほか、猪・鶏・武器・武具などもある。五～六世紀にかけてのもので、主に福岡・熊本・大分にある。大陸の石人石獸との関連を説く説もあったが、近年は埴輪の変形と考えられている」)は、王者の獅子も「亜王」(「亜聖」に擬え「亜細亜」に引掛けた造語)の虎も無い。虎は日本と違って生息している中国では準王者以上に尊ばれるが、獅子のみが『現漢』で「獸王」と記されるのは「両雄不並立(並び立たず)」の通りで、紫禁城(皇居)内外の石獅子の権勢誇示の意味と結び付けば合点する。

4 辞書とも未収の「鴉巢生鳳」(鴉巢鳳を生ず。烏の巢から鳳凰が生れる。愚鈍な親が優秀な子を生む、又は貧家から傑物が生れる譬え。出典=[宋] 釈普濟『五灯会元・卷十二・白鹿端禪師』)は、「鳶が鷹を生む」と類義ながら鳥類中の縁起最悪/最良の両極対比が中国的である。中国で広く知られる「龍生龍、鳳生鳳、老鼠生児打地洞」(龍は龍を生み、鳳は鳳を生み、鼠が子を生むと穴を掘る[の巧い])は、格差の固定化を説く嫌いはともかく龍・鳳と鼠の対が興味深い。鳳は雌の鳳に対し雄だから龍(帝)の男と両雄を成すが、この成句で鳳は後に当り陰陽の対も出る。

「嚙矢・濫觴」——三江の源頭の近接と「語/詞源」の発展・変化——「虎は千里往って千里還る」と「猛虎下山」——十二支と「生肖・属相」

中国の難読・難解語に対する日本人の吸収・活用・保存の例として、「^{こうし}嚙矢」(『広辞苑』 = 「①かぶらや。鳴り響く矢。②[莊子在宥][古く中国で開戦のしるしに“かぶらや”を敵陣に向けて射かけたことから]物事の最初。はじまり。起り。起源。“君をもって一とする”。『日国』=「[㊦]“嚙”は、さげびよぶこと]やじりに^{かぶら}鏑[かぶら]を用いていて、射ると音を立てる矢。かぶら矢。鳴箭[めいせん]」②[昔、中国で、戦争の初めに①を射たところから]物事の初め。最初、初出 = 「羅山先生文集[1662]」、漢典 = 「[㊦]莊子-在宥“焉知[㊦]曾史不[㊦]為[㊦]桀跖嚙矢[㊦]也”」)が挙げられる。

『現漢』にも同項が有る(「(書) ㊦鳴り響きを帯びる箭。転じて物事の発端或いは先行者を指す。“地球を回る人工衛星の^{うちあげ}発射は人類の宇宙旅行の嚙矢だ”)」が、『広辞苑』(『日国』未収)の【^{しやう}濫觴】(「物事の始まり。おこり。起源」)は『漢大』にも無い。『日国』不採録の和製熟語の由来は不詳の儘であるが、「濫觴」も好一對の難読・難解語である(『広辞苑』 = 「[荀子子道“其源可以濫觴”][長江も水源にさかのほれば、^{さかづき}觴^{さかづき}を濫^{うか}べるほどの、または觴に濫^{うか}れるほどの小さな流れてある意]物の始まり。物事の起原。おこり。もと。“近代医学の一”」)。

『日国』(『荀子-子道』および『孔子家訓-三恕』)に見える、孔子が子路を戒めたことば“昔者江出[㊦]於岷山[㊦]、其始出也、其源可[㊦]以[㊦]濫[㊦]觴[㊦]”の、揚子江も源にさかのほれば、觴[さかづき]を濫[うか]べるほどの細流であったとの意から。一説に、“濫”はあふれる意で、さかづきをあふれさせるほどのわずかな水流をいうとも)細い流れ。流れの源。転じて、物事の始まり。起源。起り。もと”、初出 = 「三教指帰[797頃]、漢典 = 「[㊦]虞世南-琵琶賦)は、『現漢』(「(書) ①[㊦]江[㊦]の発源の地で、水は^{さかづき}觴^{さかづき}を泛べる程に少ない。広く物事の起源を指す。②[㊦]^{うた}觴端^{うた}を発する。“詞は唐に濫觴、宋に隆興”)より詳細である。

「濫觴」の由来に出る長江(全長6300^{キロ})の源頭は青海省西南部に在り、^{チベット}西藏・四川・雲南・重慶・湖北・湖南・江西・安徽・江蘇・上海經由で東(支那)海に注ぐ。黄河(5464^{キロ})は同省の中南部に発源し、四川・甘肅・寧夏・内蒙古・陝西・山西・河南・山東を流れて渤海湾に入る。同じ西南部に^{瀾滄江}瀾滄江/メコン(流域 = 青海・^{ミャンマー}西藏・^{ラオス}雲南/緬甸・^{タイ}老撾・^{カンボジア}泰・^{ベトナム}越南、4688^{キロ}中2356^{キロ}が中国領内)の源も有り、中国第1・2の大河(美称「母/父親河」)と東南亜細亜第1の大河は、五湖・五岳と対を成す三江に繋がる様に青海に濫觴が集まる。

和製漢語「語源・語原」(『広辞苑』 = 「個々の単語の成立の成立・起源。単語の原義。“[㊦]銅[㊦]を“肴[㊦]瓶[㊦]へ”とする類。“一を探る”)。『日国』 = 「個々の単語のもともとの形や意義。単語の音韻と意味が結びついた由来。また、それが現在の語形および意味・用法に変化するまでの歴史」、初出 = 「都繁昌記[1837]」)は、中国では日本語に無い広義の「詞源」(『現漢』 = 「^{フレーズ}語句と熟語の起源。広く語句の発展・変化の状況を指す」と言う事が多い。単語や語句の本源は理解・使用の上で重要な意味を持ち、同じ文献が初出と為る語句の多岐に渉る発展・変化も青海起源の三江の展開と似通う。

莊子(莊周。戦国時代の思想家、老子と並ぶ道家の代表者)は、人間の純朴な本性と乖離する深い智・欲や聖王提唱の仁徳が世を乱したと見、どうして賢者の曾子(曾^{しん}參。孔子の弟子)や史^{ちゆう}鯀(春秋時代の衛の忠臣)が、極悪人^{けつ}の桀王(夏朝の最後の君主、殷の^{ちゆう}紂王と併称される暴君の典型)

や盗跖^{せき}(春秋時代の伝説的な大盗賊)を呼び起す嚙矢でないと言えようかと嘆いた。逆説の比喩に用いられた鳴箭は戦端を開く合図の意で、後に建設的な事柄や肯定的な評価の要素が増して来たが、四獣→虎の展開で宣戦布告の代りに放された暗号名「トラ」の嚙矢を想起する。

太平洋戦争(1941.12.8~45.9.2)の嚙矢と為る日本海軍の真珠湾攻撃の際、敵前で第1航空艦隊司令部へ「我奇襲ニ成功セリ」を伝える打電は「トラトラトラ」の略号を使った。参謀が深意も無く考案した「ト」+「紫^{むらさき}」の各1音節の4組から「トラ」が選ばれたが、「虎・寅」との語呂合せから様々な解釈が生れた。飛行総隊長淵田美津雄(最終階級=大佐)は自分の寅年(1902)生れとの暗合で最高の縁起を喜び、旗艦「赤城」宛の発信が広島連合艦隊旗艦「長門」にも直通したと後日に聞いて、「千里行く虎、千里を帰った」と感慨を催した。

「虎は千里往って千里還る」(『広辞苑』) = 「虎は一日の間に千里の道を行き、また戻ってくることもできる。勢いの盛んなさまのたとえ。『日国』の初出 = 「譬喩尽 [1786]」) を引き合いに出すまでもなく、英訳「Tiger, tiger, tiger.」も漢訳「虎! 虎! 虎!」も虎^{タイガー}の如く猛襲する意味で捉えられる。『現漢』の【虎】②の用例「~将|~有生氣」(「虎[の様な猛]将」「虎の如く生氣に溢れる」)から、異名「馬來の虎」の山下奉文陸軍中將(後に大將)の「猛虎下山」(猛虎山を下る[出撃])と、その英領新嘉坡攻略の開始直後の真珠湾攻撃のトラ連送の「虎嘯」も連想される。

両国共通の暦法上の十二支は中国で十二宮に獣を当てた称(①子=鼠、②丑=牛、③寅=虎、④卯=兔、⑤辰=龍、⑥巳=蛇、⑦午=馬、⑧未=羊、⑨申=猿[生れ年を表す中国語=猴]、⑩酉=鶏、⑪戌=犬[同=狗]、⑫亥=猪[中国語の「猪」は豚の意、豚の原種「野猪」(『広辞苑』の【猪】に有る別称)は番外])で、12の時辰(夜半・鶏鳴[23~1、1~3時]〈中の8時間帯略〉黄昏・入定[19~21、21~23時])、方位(北・北東微[中国語=偏]北・北東微東・東・東南微北・東南微南・南・南西微南・南西微北・西・西北微南・西北微北)等の他、中国語で「生肖・属相」と言う生れ年に用いる。

12の生れ年は「生肖」の字・義の通り出生時期を動物に象^{かたど}る発想であるが、日本語の訓読の「巳・蛇」を除く動物との一体化に対し、中国語の12組は全て発音の類似が無い。淵田中佐は「トラ→寅→虎」の連想から成功を確信したが、日本占領下の上海で寅年(1938)に生れた徐寅生(元国際卓球連盟会長)の「寅」(yín)は、『現漢』の前の親字「淫」を始め常用同音字に「陰・隱」等と負の形象が強い。「淫」の前の「銀」は国際五輪功労章銀章受章(1998)で靈験が有る半面、男子^{シングルス}単^{メダル}の金牌とは無縁に終わった(世界選手権同^{ダブルス}複優勝が1回)。

十二支には四霊中の龍が原型の蛇と共に入り、龍・虎の存在は獸王の不在を浮彫にする。『現漢』の【獅子/獅子搏兔/獅子大開口/獅子狗(狎)/獅子舞】に次ぐ最後の【獅子座】は、十二星辰に午・馬系列の獅子宮として出る(十二支の動物名が付く人馬/金牛/白羊宮は関連せぬ寅・虎/酉・鶏/戌・犬に配し、逆に丑・牛/未・羊に当るのは摩蝎/巨蟹宮)。「獅子搏兔/獅子は兔を撃つに全力を用う」(簡単な小事をも軽視せず全力を尽す譬え)の様に、獅子と兎は弱肉強食の世界で比べ物に成らない高下の差が有るが、優勝劣敗の相場とは逆に兎が十二支に入る。

鼠の早い者勝ち——「子は繁栄，丑躓^{つまず}き，寅千里を走り，卯跳ねる，辰巳天井，午尻下がり，未辛抱，辛酉騒ぐ，戌笑い，亥固まる」——「掉尾・猪突」

獅子も中国の猛獣の両雄の虎・豹も哺乳綱食肉類（猫目）猫科（18属・37種）に属し，同類に哺乳類の短距離走王者（時速100^{キロ}超）の狩猟豹や，亀や鹿（同じ霊獣の麒麟の原型）を食べる米州豹も居る。大洋州以外の4大陸で頂点捕食者を成す同科の内に獅子と猫は集団生活の習性が有り，食肉類（学名Carnivora）の別称と同科に名を冠する猫は人間に最も馴れ親しむ益獣なのに，2大愛玩動物の首位の犬（以下の飼育数3・4位は魚・鳥）と共に十二支に列する事が無く，皮肉にも餌の害獣鼠が最前列に据わる事と為った。

中国でも知れ渡る猫落選の経緯の伝説に拠れば，神が門前に到着した順で十二支の動物を決める事にし，牛が鈍^{のろ}さの自覚から早く出掛け一番乗りが出来たが，門が開けられた瞬間に牛の頭上に便乗した鼠が飛び出て1位を不正に取った。猫は鼠がわざわざ集合日を間違えて告げた所為で入れず，故に鼠を敵視し執念深く追い掛け容赦無く噛み殺すのだ，と言う。儒・道・仏家が俱に嫌う小賢さ以上の悪賢さに由る鼠の早い者勝ちは不公平な結果と思われ，中国では鼠は狡い・せこい・汚い印象が定着し百害有って一利無し^のの悪者である。

十二支に因んだ日本の相場格言「子は繁栄，丑躓^{つまず}き，寅千里を走り，卯跳ねる，辰巳天井，午尻下がり，未辛抱，辛酉騒ぐ，戌笑い，亥固まる」は，鼠の子沢山に拠って子年の上げ相場を予言し，東京証券取引所の戦後再開（1949.5.16）以来の実績も高い的中率を示した（60・72・84・96・2008・20年の日経平均株価の年間騰落率は+55.1%，+91.9%，+16.7%，-2.6%，-42.1%，+16%）。21世紀のリーマン衝撃と新型コロナウイルス禍の直撃を含む6回の平均は+22.3%で，鼠に抱く人間の嫌悪とは逆に十二支の起点に相応しい好調・好感が認められる。

丑年の通年5回（1961・73・85・97・2009年の+5.6%，-17.3%，+13.6%，-21.2%，+19%）は，平均-0.06%の不成績で「躓^{つま}き」の経験則を証明した。和製漢語「牛歩」（『広辞苑』=「牛のようにのろい歩き方。物事が遅々として進まないさまにいう。牛のあゆみ」，『日国』の初出=「江戸から東京へ[1922]〈矢田挿雲〉」）も不名誉であるが，十二支の選抜で牛が俊敏・神足の脱兎・駿馬等を抜け出したのは，「笨鳥先飛」（不器用な鳥は先に飛ぶ。『現漢』=「能力の劣った人は事をする際に，立ち遅れを恐れて他者より先に行動する譬え[多く謙遜語に用いる]」）の弱点克服の結果である。

子・丑年（4勝2敗，3勝2敗）の騰落率は12年中の首・尾から2位で，次の「寅千里を走り」（1勝5敗，+1.8%，10位）は「虎は千里往って千里還る」の通り，行/往って来い（相場が上又は下に動いてから元に戻る）を見せ，「卯跳ねる」（4勝2敗，+16.4%，4位），「辰巳天井」（同，+28%，1位/同，+13.4%，6位），「午尻下がり」（3勝3敗，-5%，12位），「未辛抱」（4勝2敗，+7.9%，8位），「辛酉騒ぐ」（5勝1敗，+8.8%，7位/同，+15.7%，5位），「戌笑い」（4勝2敗，

+6.2%, 9位), 「亥固まる」(5勝1敗, +16.5%, 3位)は、概ね格言通りの趨勢を呈した。

子年の繁栄は最初の2回の大相場で世紀級の世界金融危機に由る史上最大幅の暴落を補う事が大きく、卯年の跳躍は特に朝鮮戦争(1950.6.25~53.7.27)の齎した特需の神風(51, +63%)に負う。辰年の1位は先ず史上最大の暴騰(1952, +118.4%)で押し上げられ、情報技術関連企業株式投資泡沫崩壊(2000, -27.2%)でも覆せなかった。2番天井と期待される巳年は2001年の痛手(-23.5%, 前年に次ぐ史上4番目の下落幅)の後、13年に安倍経済学(安倍晋三首相が掲げた経済政策)の浮揚効果で+56.7%(史上4番目の上昇幅)を遂げた。

最悪の「午尻下がり」は泡沫経済崩壊に由る史上2位の下落幅(1990, -38.7%)で引き下げられ、牛の躓きよりも酷い馬の蹉跌は両者の12位中11位・最下位に現れる。泡沫経済の最盛末期の続伸(1988・89, +39.9・29%)は「辰巳天井」に寄与し、崩壊後の続落(91・92, -3.7・26.4%)は「未辛抱」「申騒ぐ」に符合するが、格言中「下」が出る午年に泡沫崩壊の開始と最大級の暴落(中国語=「暴/惨跌」)が起きたのは、十二支と関る盛衰循環周期を裏付ける巡り合せて、作者不明の現代の格言の持続的な成立から天意を感じずにいられない。

十二支の始・終に当る子・亥の2・3位の良績は首尾の連環を飾り、12年1巡の周期性の小型版の様な1年内の月別季節性を見ても、日経平均株価の60年間(1959~2018)の月間騰落率の3傑(1・3・12)に年始・末が入り、次の11・4月も暮れ又は会計年度(官公庁)の起点に当る(次は2・6・5・[以下は前月比^{マイナス}の負け組]7・10・8・9)。紐育工業株30種の同期間の上位陣(4・11・12・3・1)は全て日本の1~5位に在り、次(7・10・2・5・[以下同上]8・6・9)の内9月最悪も一緒に、12月の同じ3位は日本の亥・年末高と3重映しに為る。

その勢いは正に、掉尾(『広辞苑』=「①尾をふるうこと。②物事や文章の終りに至って勢いのふるい立つこと。転じて、最後。とうび。“一の勇を奮う”“一を飾る”。『日国』=「□尾を振ること。一説に、つかまえられた魚が死ぬ直前に尾を振るの意とする。②物事が最後に来て勢いの盛んになること。また、単に最後の意。とうび」, □の漢典=「司馬相如-上林賦」, ②の初出=「朱雀日記 [1912] <谷崎潤一郎>。【掉尾】は「チョウビの慣用読み。“一を飾る”」/「“掉尾 [ちょうび]”の慣用読み」物事の終わりの方になって勢いが盛んとなること。また、単に最後。おわり」, 初出=「雑囊 [1914] <桜井忠温>」)である。

中国では「掉尾」は廃れ(「尾大不掉」[尾が大き過ぎて掉り難い。機構の下部が強く上層部が弱い、又は組織が膨大・散漫で指揮が効かない譬え]は常用)、日本の「掉尾の一振/一振り」(株価が年末に向けて上昇する)も通じ難い。亥年の好勝率(1959~2019, +31.3・36.6・23.4・0.7・-11.1・+18.2%)は新周期への期待の思惑に由らず、「固まる」よりも「子の繁栄」へ向う「猪突」(『広辞苑』=「猪の如くにむこう見ずに一直線に進むこと。『日国』=「イノシシの如くに向こう見ずにまっすぐ進むこと。向こう見ずに事をなすこと。猪突猛進」, 初出=「続俳諧師 [1909] <高浜虚子>」)と言える。

「猪突豨勇 / 猛進」——「鼠目寸光 / 鼠肚鷄腸」——「鼠窃狗盜 / 鷄鳴狗盜」

——「鷄零狗細 / 鷄毛蒜皮」——「鷄口牛後」——「牛鬼蛇神 / 牛頭馬面」

「猪突豨勇」(『広辞苑』 = 「[漢書食貨志下] [“豨”は大きなイノシシ] あとさきかまわずに突進すること。また、その人。いのししむしゅ。『日国』 = 「[“豨”は、イノシシの子の意] イノシシやイノシシの子のように向こう見ずに進む勇氣。また、その勇士」, 漢典 = 同上「莽大募=天下囚徒人奴-, 名曰=猪突豨勇-) は、日本語の使用歴が未確認であるが、和製漢語「猪突」は「猪突猛進」(同 = 「むこう見ずに猛然と突き進むこと」 / 「ひとつのことに向かって向こう見ずにまっすぐに、猛烈ないきおいで突き進むこと。猪突」, 初出 = 「暗い平原 [1952] (井上靖)」) という日本人好みの「猛烈」語を生んだ。

「亥固まる」も猛進の猪突も和語の「猪」に由来したが、中国語の「豨」(『現漢』 = 「古書で豚 [原文は“猪”] を指した) の類は、野猪の野性が無い家畜で魯鈍な怠け者の形象が強い。12月の株高は中国語の「猪」で形容するなら、「~脂(旨み [容易く生じる利益]) の塊」と言った所であろう。「亥」は辛亥革命(1911)の知名度の御蔭で難読度が「卯・酉・戌」より低い、中国語の十二支と12の「生肖」動物は発音の違いで峻別される半面、難読字が多い所為も有って生れ年を表す場合は、「属猪」(豚年生れ)と言う風に動物の名称を用いる。

十二支の首座を占める鼠は『現漢』の11項中の評価に関する6項で、【鼠輩】(取るに足りない輩 [人を罵る言葉], 例 = 「名も無い詰らない奴, 取り立てて言う程の者ではない」), 【鼠竄】(匍鼠の様に慌てて逃げる。例 = 「顔を隠してこそこそ逃げる」), 【鼠目寸光】(至近距離しか見えない鼠の様に) 視野が狭く、見識が浅い), 【鼠肚鷄腸】(度量が鼠・鷄並み。【小肚鷄腸】の副項目), 【鼠窃狗盜 / 偷】(こそ泥。光明正大でない事をする譬え。出典 = 「《史記・劉敬叔孫通列伝》: “此特群盜鼠窃狗盜耳, 何足置之齒牙間”」) と、悉く貶す対象と為り用例が示す様に罵倒や侮蔑に能く使われる。

中性的な【鼠標】【鼠標器】(【電腦の位置入力装置】マウス), 【鼠標手】(長時間のマウス使用に由る手・手首の損傷), 【鼠蹊】(鼠蹊 / 径 [股の付け根]) の他に、【鼠疫】(鼠類の病原菌を病原体とする黒死病) や、【鼠】の語釈中の「繁殖力がとても強い」に続く「鼠疫を伝播する者も居る」は、鼠への嫌悪と共に警戒をも顕にする。「鼠疫」の別称「黒死病」は和製漢語の借用であるが、pestの和訳には「鼠」が出ない。尤も、『広辞苑』の【鼠】①は繁殖力と共に害への言及も無いが、③「ひそかに害をなす者のたとえ」は同じ断罪調である。

【鼠取り・鼠捕り】(① = 「鼠を捕らえて殺すこと。また、それに使う器具・薬剤」) の③(「俗に、警察のスピード違反取締りをいう」) で、法の番人の不正摘発も倉庫の穀物や経典を守る番猫の鼠害退治に譬えられるから、十二支の「悪獣は良獣を駆逐する」(「悪貨は良貨を駆逐する」) に擬えた造語は理に適わない。一方、【鼠窃】(「[鼠のこそこそと物をぬすむの]にたとえた語」こそどろ。こぬすびと。鼠賊。『日国』の初出 = 「広益熟事典 [1874] (湯浅忠良)」), 【狗盜】(「こそどろ。こぬすびと。鷄鳴一」, 『日国』の漢典 = 「韓非子 - 外儲左下」) が有るが、『史記』出典の複合熟語は無い。

『広辞苑』の【鷄鳴狗盜】(「[史記孟嘗君伝] [中国の戦国時代, 齊の孟嘗君が鷄の鳴きまねの上手

な者や狗^{いぬ}のように物を盗む者を食客としていたおかげで難を逃げたという故事から] ものまねやこそどろのようなくだらない技能の持主。また、くだらない技能でも役に立つことがあるたとえ) は、【函谷関の鶏鳴】(「[史記孟嘗君伝] 孟嘗君^{もちゅうきん}は、秦を逃れて夜半函谷関に達したが、関は鶏鳴までは開かない定めであったため、従者に鶏の鳴まねをさせて群鶏がこれに和し、関門が開かれ脱出できたという故事。鶏^{けい}の空音^{そらね}」) で後半が詳説されたが、脱出を導いた鶏鳴の前段の「狗盗」の熟語は無い。

『日国』の【鶏鳴狗盗】(「[秦の昭王に捕えられた齊の孟嘗君が、狐のかわごころもを狗 [いぬ] の真似をする食客に盗み出させて王の寵姫に贈り、のがれて夜半に函谷関に来たが、鶏鳴までは開門しない掟があったので、ニワトリの鳴き真似の上手な食客に鳴き声を出させて脱出することができたという『史記-孟嘗君伝』の故事から] ニワトリの鳴きまねをして人をだましたり、犬のようにして物を盗んだりする卑しい者。ニワトリの鳴きまねや犬のまねのような事しかできないくだらない者。また、どんなくだらない技能でも、役に立つことのあるたとえ) は、鶏鳴を上回る狗盗の経過と成果を記している。

【鶏鳴】(「①ニワトリが鳴くこと。また、その鳴き声。②一番鶏 [いちばんどり] が鳴くころ。午前二時ごろ。丑 [うし] の時。八つ時。③よあけ。あけがた」, ①③の漢典 = 「詩経-鄭風」[春秋左伝-宣公一二年] は、^{語誌}の説明(「鶏の鳴き声から転じて②③の意を生じた。[中略]『万葉-一〇五』では“鶏鳴”を“アカトキ”と訓じている) に対し、初出順が②③①(「延喜式 [927]」「後二条師通記-寛治六年 [1092]」「明月記-文治四年 [1188]」) である。【狗盗】【鶏鳴狗盗】の初出(「六如庵詩鈔-二編 [1797]」「江戸から東京へ [1921] <矢田挿雲>) と照合して、対の単語・熟語の形成が遅い。

【鳥 / 禽^{そらね}の空音】(「[齊の孟嘗君が秦の国を脱出しようとして夜中に函谷関に着き、供の食客が鶏の鳴きまねをして関門を開けさせ、無事通過したという故事から] 鶏の鳴きまね) は、「函谷関の鶏鳴」(未収) に由来した初出(「後拾遺 [1086] 雑二・九三九“夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に相坂の関はゆるさじ” <清少納言>) は、「鳥」の表記ながら【鶏鳴】の③①より早い。用例3点の最後(「俳諧・父の終焉日記 [1801] 五月八日“あはれ、鶏の空音を作りて、関の戸の明しためしはあれど”)) で、小林一茶(俳人) は六如^{りくによ}(漢詩人) の4年前の「狗盗」と呼応する様に「鶏」と書いた。

『現漢』の【鶏鳴狗盗】はえげつない手口(秦王に献上した狐裘を宮中から盗み、寵姫を買収して釈放を得た) も記し、取るに足りない技能、又広くこそ泥を指す意と言う語釈で、日本の辞書の有益な側面への肯定と一線を劃し、「騙開城門」(騙して城門を開けさせ) も欺瞞^{いさぎよ}を屑しとせぬ道徳判断に基づく。狗盗が先に有り鶏鳴よりもあくどいのに時間・程度の順と為らないのは、声調順(第1・2・3・4声) も一因であろうが、【鶏零狗碎】【鶏毛蒜皮】(俱に詰らぬ瑣事を表し、前者は物事がばらばらで纏らない様をも形容する) 等の鶏の負の形象が再認識できる。

【鶏口牛後】(「[戦国策・韓策一]: “寧為鶏口、不為牛後。” 規模の小さい処で切り盛りするのを望み、規模の大きい処で人に支配されるのを好まない事の比喩。鶏屍 [主の意] 牛従とも言う) 」。【鶏屍牛従】は同義) は、日本語で「鶏口と為るも牛後と為る勿^{なか}れ」と言う(「広辞苑」 = 「[史記蘇秦伝・戦国策韓策“寧ろ鶏口と為るも牛後と為る無かれ”] 小さい集団であってもその中で長となる方が、

大きな集団の中でしりに付き従う者となるより良い、という意。『日国』語釈の冒頭の漢典由来は「『史記-蘇秦伝』『戦国策-韓策・昭侯』の“臣聞、鄙諺曰、寧為_二鶏口_一、勿_レ為_二牛後_一”から』。

その初出（『江戸繁昌記 [1832-36]』）は「鶏鳴狗盗」より約 80 年早い。【牛鬼蛇神】（妖怪変化。社会の醜悪な物事と様々な悪人の譬え）、【牛溲馬勃】（牛溲 [牛の尿。一説に車前草] と馬勃 [菌類の一種] は薬に使える。卑賤ながら役立つ物に譬える）、【牛頭馬面】（迷信で閻魔大王の手下の 2 人の鬼は顔が其々牛と馬に似ている。転じて各種の陰険・醜悪な人を指す）等は、日本語に入っていない。【牛】の 36 項中【牛馬】も日本語と同じ弱者の意で暗い感じを帯びるが、親字の②③（「脛固執或いは傲慢」「口 脛凄腕。実力が強い」）は賛否両面の複合性格を示す。

「兔死狐悲 / 兔死すれば狐これを悲しむ」——「狡兔死、走 / 良狗烹；飛 / 高鳥尽、良弓藏；敵国破、謀臣亡」——「狡兔三窟」と「因幡の素兔」

十二支中の鼠・牛・虎に次ぐ 4 番目の兔は『現漢』の 8 項の内 4 字熟語が 2 項有り、その【兔死狗烹】（『史記・越王勾踐世家』：“蜚 [飛] 鳥尽、良弓藏；狡兔死、走狗烹。”鳥が居なくなれば、良い弓は不用と為り仕舞い込まれて了い、兔が死ねば、獵犬は煮て食われて了う。事が成功した後に、曾て大いに力を尽した人を殺して了う事の比喩）、【兔死狐悲】（同類の滅亡に由って悲傷を感じる事の比喩。“兔が死ねば狐が悲しみ、生物は同類を傷む [原文 = 物傷其類]”）は、共に日本で複数の熟語・成句と為り他の動物の場合より高い共感性を現す。

『広辞苑』の【狡兔死して走狗烹にらる】（『史記越王勾踐世家』兔が死ねば獵犬は不用となって煮て食われるように、敵国が減びた後には、軍事につくした功臣も邪魔者とされて殺される。どんなに役に立ったものでも、用が済めば処分される。狡兔走狗。狡兔良狗）、【狡兔良狗】（『史記淮陰侯伝』“狡兔死して走狗烹らる”に同じ）、【飛鳥尽きて良弓藏めらる】（『史記越王勾踐世家』“蜚鳥尽良弓藏、狡兔死走狗烹” [“蜚”は“飛”と同じ] 飛ぶ鳥がいなくなると良い弓が不用となってしまう込まれるように、用がなくなれば捨てられる）は、「狡兔走狗」の併記と合せて『現漢』以上の扱ひである。

『日国』の【狡兔死して = 走狗 [= 良狗] 烹らる】（『韓非子-内儲説下』、『吳越春秋-夫差内伝』などに見えるたとえ）狡兔が死ねば、獵犬は不用となり、煮て食われる。敵国が減びれば、それまでからのあった謀臣は邪魔にされて殺されるということのとえ。狡兔尽きて良犬烹らる）、【飛鳥尽きて良弓 = 藏る [= 藏めらる】（『由来の説明同上』捕えるべき鳥がいなくなると弓はしまわれてしまう。敵国を滅ぼすのに功のあった謀臣も用がすめばいらぬもののように思われて殺される。用のある時は使われて用がなくなると捨てられるたとえ。狡兔 [こうと] 死して走狗烹 [に] らる）も然りである。

後者に付す漢籍（『史記-越王勾踐世家』）を含めて中国の古典には多く見えるが、『日国』の両項の初出（『歌舞伎・会稽源氏雪白旗 [1888]』『歌舞伎・星月夜見聞記 [荏柄の平太] [1880]』）は、福沢諭吉（思想家・教育家）の「脱亜論」発表（85）の前後に約 2 千年前の中国の警句を

取り入れた。『史記淮陰侯伝』の「狡兔死，良狗烹；高鳥尽，良弓藏」に続く「敵国破，謀臣亡」（敵国破れて，謀臣^{はろ}亡ぶ）は，動物・狩猟の譬えの対の対が見事過ぎる故か両国で成句化の出番が無かったが，3組の各2句の各3字は字義・声調の対比も寓意と共に妙味が濃い。

『広辞苑』『日国』の【狡兔】（「すばやい兔。かいこい兔」/「すばしこい兔」，用例＝「三教指帰 [797頃] 下“缺臂，疎齒，若_二狡兔臂_一”，漢典無し）は，兔の長所と特徴（【兔】の「行動は敏捷・活発」/「上唇は縦に裂けている」）に符合する。『現漢』の【兔】は両書と異同が有り（繁殖力は非常に大）/「繁殖力が強い」は無く，『日国』に無い身体能力として「跳躍に長け，走るのがとても速い」，『広辞苑』に無い「上唇は真ん中に裂けている」と有る），【狡兔三窟】（「狡い兔 [原文＝狡猾の兔子] は3つの巣を持つ。身を隠す処が多く有る比喩」）の通り，中国語の「狡兔」は文字通り狡い兔である。

『日国』の語話の冒頭（『古事記-上』『因幡風土記逸文』には，鰐を騙す狡猾な側面と，騙した相手に報復される無力な姿とが対照的に描かれる）に，「因幡の素兔」（『広辞苑』＝「出雲神話の一つ。古事記に見える。淤岐島^{あき}から因幡国に渡るため，兔が海の上に並んだ鰐^うの背を欺き渡るが，最後に鰐に皮を剥ぎとられる。苦しんでいるところを，大国主神に救われる」）が出る。中国人が持つ兔の臆病・軟弱の形象と乖離し，上陸直前の勝利宣言で仕返しを招く展開も欺瞞の中途半端が感じられるが，日本語の「狡兔」に自国で語られた狡猾^{さか}の性が抜けるのは不自然である。

「兔死すれば狐これを悲しむ」（『広辞苑』＝「宋史李全伝」同類に不幸があれば，あすはわが身と，縁者がこれを悲しむこと。「狐死して兔泣く」とも），『日国』の初出＝「浄瑠璃・曾我会稽山 [1718]」，漢典＝「田芸衡－玉芙蓉雪」，【狐死して兔泣く】（『広辞苑』＝「“兔死すれば狐これを悲しむ”と同じ。『日国』では前出項に付記，未立項）は，【狐】の良からぬ性格（両書の「日本では人をだますとされ，ずるいものの象徴にされてきた」/「ずる賢い性質で，人をだますなどともいわれる」，『現漢』の「狡猾で疑い深い」と照らせば，虎の威を笠に着的狐と似通う狡賢さは兔にも有るという事が分る。

『日国』の【狐烹らるる時は兔これを悲しむ】（「わざわいが一族に及ぶことを恐れるたとえ。また，同類をいたむたとえ」）は，漢典（「宋史－叛臣伝下・李全下“狐死兔泣，李氏滅，夏氏寧独存”」）が「狐死して兔泣く」の由来（『漢大』の【狐死兔泣】「“物傷其類”に喩える」の出典も同じ）である。初出（「読本・椿説弓張月 [1807-11] 後・二〇回」）の引用（「常言に，“狐” [キツネ] 烹 [ニ] らるるときは，兔 [ウサギ] これを悲 [カナ] しむ」といへるは，禍の族におよぶをおそるるなり）は，「常言」（当該項の②「ことわざ。格言」，初出＝「読本・昔話稲妻表紙 [1806]」）に馴染^{なじみ}度を窺^{うかが}わせる。

「常言」——「(大丈夫) 一言既出，駟馬難追 / 駟馬追^{あた}う能わず / 駟も舌に及ばず」——「虎心・豹胆」——「金烏西墜・玉兔東昇」「烏飛兔走」

【常言】①（「日常，慣用的に用いる語。決まり文句。常套語」，初出＝「語孟字義 [1705]」）は，『漢大』の①（「普通に話す」，出典＝「南朝梁劉勰《文心雕龍・情采》」）と違う。②は③（「民間に流布

する口頭語、諺・格言の類]、初出 = 「宋宋祁《宋景文公筆記・積俗》)と同義で、両言語共通の方が『現漢』の1義(「習慣的に常に言う諺・格言の類の言葉。例えば“1つの事を経験しないと、1つの智恵が増えない”、“人が勤勉に労作すれば、畑は相応に報い荒廃しない”[原文 = “不經一事，不長一智”、“人勤地不懶”])と為るが、この単語は日本語の初出の250年後『広辞苑』初版に入らなかった。

漢典を載せない『日国』の②の初出(「四“常言[ジャウゲン]にも大丈夫の一言は、駟馬も走らずといへり”)は、【大丈夫の一言は駟馬も = 走らず [= 追い難し】(「立派な男子の一言は、いったん口から出た以上は、四頭立ての馬車で追っかけても、とりかえしがつかない。男子がいったん口にした以上、そのことばをひるがえすことはできないということ」、初出 = 「読本・忠臣水滸伝 [1799 - 1801]」)でも、『漢大』の【一言既出、駟馬難追】に有る漢典(7点、同形語の初出 = 「元李寿卿《伍員吹簫》第三折：“大丈夫一言既出、駟馬難追、[下略]”)は引いていない。

【一言既に出ずれば駟馬も追い難し】(「“駟”は四頭立ての馬車、または、その馬のこと。『論語-顔淵にある“駟不_レ及_レ舌”に基づくことば]一度口から出たことばは四頭立ての馬車で追っても取り返せない。ことばを慎むべきことのとえ)、初出 = 「浮世草子・小夜嵐物語 [1698]」、【駟/四馬 = 追う能わず [= に及ばず】(「『説苑-説叢』の“口者関也、舌者機也、出_レ言不_レ当、駟馬不_レ能追也”から]非常に速いこと。また、一度口に出してしまうととりかえしがつかない、発言は慎重にしなければならないことのとえ。駟[し]も舌に及ばず、同 = 「将門記 [940頃か]」)には、来歴の漢典が記される。

『現漢』の【一言既出、駟馬難追】(「一言が口から出ると、四頭立ての馬車で追っても取り返せない。口に出した言葉は撤回できない比喩。言った事には責任を持ち、後悔し反故にしては為らない事の強調)は、【駟馬】(「書」同じ馬車を曳く4頭の馬)の例で「~高車」(蓋の高い四頭立ての馬。高貴な人の立派な乗物)の後に出る、『広辞苑』の成句項は別の【駟馬も追う能_あわず】(「『説苑談叢]“駟も舌に及ばず”に同じ)、【駟も舌に及ばず】(「『論語顔淵]言葉の伝わるのは非常にはやいもので、そのはやさには四頭立ての馬車も及ばない。言語は慎むべきだ。“駟馬も追う能_あわず”とも)である。

『漢大』の【兔死狐悲』の初出(「元汪元亨《折桂令・帰隠》曲)は、『日国』の【兔死すれば狐これを悲しむ』の漢典(【明]田芸衡 [16世紀中葉存命、文人]著)の前の時代に現れた。【狐兔之悲】(狐兔の悲しみ。「狐死兔悲」に同じ)の初出(『醒世恒言・兩県競義婚孤女)は、馮夢龍(明末の文学者)編章回小説集(1627)である。『漢大』の【百獸】(「衆の獸」、初出 = 「『周礼・地官・圉人)の例(5点中第4の「宋蘇軾《司竹監燒葦園因召都巡檢以其徒会罝園下》詩：“黄狐老兔最狡捷、賣侮百獸常矜誇。”)と共に、狐・兔を「狡獸」(造語)として同類視する固定観念が示される。

兔科兎目の兔は犬科狐属の狐と狡さを共有し、鼠科の齧齒類(鼠目)の鼠並みの繁殖力を持つ。『日国』の【鼠】の「繁殖力は強く年に数回子を産む」は『広辞苑』に無いが、両書と違って【兔】で繁殖力に触れない『現漢』は【鼠】に特記する。それは「老鼠会」(鼠講)の無限連鎖の様な害獣増殖への警戒も有ろうが、鼠算(和算で、正月に雌雄2匹の鼠が12匹の子を生み、翌月から毎月に親子何れも12匹を生んで行けば、12月に 2×7^{12} [276億8257万4402]匹の大

数と成る、という類の鼠の子算用)の複利的急増は、同じ子沢山の兎に無い悪の形象の故に恐い。

【豹子胆】(「殊に大きい胆力を指す。極めて危険性の大きい事をするのを“豹の胆を食う”と言う)や同義の「(吃)老虎心」(虎の心臓[を食う])と逆に、「蚤の心臓」(気が小さい/小心)に近い中国語は【胆】②「胆量」(胆力)の用例「～小如鼠」(胆が小さく鼠の如し)で、その背景に「老鼠過街、人人喊打」(鼠が通りを横切ると、人々はやっ付けろと叫ぶ。同項=「人に危害を加える者・事は人々に痛恨される形容」)が有る(『日国』の【鼠】①も「愛玩用や医学の実験用となる種もあり、また一部の種は農作物・食料品・樹木などを食い荒らしたり、病原菌を媒介する害獣として扱われる」と言う)。

兎の臆病も非力な故の生存確保の本能に由り、難を逃れる為に鼠と同じく穴を掘って隠れる技が身に付く。『戦国策齊策』に見える孟嘗君の食客馮驩の「狡兎三窟」の進言は、3つの隠れ穴が有る狡兎は僅かに死を免れると説き、彼は民心収攬と対外懐柔で3重の安全保障を築いた。資産保全を図る分散投資等の教えとしても有益であるが、鶏鳴狗盗の話が複数の和製成句が生れたのにこの熟語が入らないのは、小動物の観察が得意で物真似が人気を博する国柄らしく、中国人は危険性回避を重んじ鳥の目で布石を打つ事に抜かりが無い。

『日国』の【兎】の語誌の承前の美談(「仏典に典拠を持つ『今昔-五・一三』には、帝釈が化した老人をもてなすために、兎が我が身を焼いて供する説話が見える。死後兎はその誠実さをたたえられ月に住むことになるが、この説話は講経談義の場においてさかんに語られ、“月の中で兎が餅をついている”という伝説はこれらを通じて流布されたい)は、捨身奉仕の仏典伝説や月との一体化も日本語の「狡兎」に対する美化の一因かと思えるが、経緯の違いはともかく月の中で兎が薬を搗いているという中国の伝説と通じる。

『広辞苑』の【玉兔】(「[月中に兎がすむという伝説から]月の異称。謡、俊寛“一昼眠る雲母の地”」)は、【金鳥】(「[太陽の中に三本足の鳥トリがいるという中国の伝説による]太陽の異称」)と相互参照に為る。後者に【金鳥玉兔】(「太陽と月。転じて、歳月。略して“鳥兔”とも」)が付き、【鳥兔】(「張衡、靈憲序」[金鳥玉兔の略。中国の伝説で、太陽には三本足の鳥が、月には兎がすむとされたことによる]①太陽と月。日月。②歳月。月日。光陰。“一匆匆ト”)、【三足の鳥】(「太陽の中にすむという足が三本ある鳥。吉祥とされる。また、太陽の称。金鳥」)も有る。

『現漢』の【玉兔】(「(書)伝説上の月宮の中の白兔。又転じて月を指す。“玉兔東に昇る”」)は日本語より広義で、【金鳥】(「(書)太陽を指す[伝説で太陽に三本足の鳥が居る]。“金鳥西に墜つ”」)も例文で一定の常用度を示す。「鳥兔」「金鳥玉兔」(『漢大』採録/未収)が無い代りに有る【鳥飛兔走】(「日月の運行を指す。光陰が経つのが速い形容[古代の伝説で、太陽の中に三足の鳥が居り、月の中に玉兔が居ると言う]」)と共に、「金・玉」「鳥・兔」「日・月」「黒(鳥)・白」「西墜・東昇」「飛・走」の対を見せ、「狡兎・走狗・飛鳥」の字とも重なる。

走狗・鷹犬——「犬に論語/犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ」——「犬骨折って鷹

「餌食に為る」——「一富士二鷹」と「雄鷹／鷹鼻鷄眼」——「狗仗人勢／狗屎堆」

「走狗」(『現漢』 = 「元は獵犬を指し、今は人に買収・養成され悪事を手伝う者に譬える」。『広辞苑』 = 「①狩猟などで駆け走って人のためにおいつかわれる狗。②転じて、他人の手先となって使役される人を軽蔑するという語。“権力の一”)は、『日国』(「狩りのときに鳥や獣を追いたてるために、人に使われる犬。転じて、人の手先となって使われる者を軽蔑するという語)で、漢典(「戦国策-斉策・宣王)が狩猟の意であるが、初出(「不在地主 [1929] <小林多喜二> 一 “警察は如何にも君等の言ふ通り、資本家の走狗だ”)の300年余り前、『桃花扇』(孔尚任 [戯曲作家] 著)に侮蔑語の例があった。

『広辞苑』の「いぬ【犬・狗】」の4義中の①(「ネコ目 [食肉類] イヌ科の哺乳類。よく人になれ、嗅覚と聴覚が発達し、狩猟用・番用・軍用・警察用・労役用・愛玩用として広く飼育される家畜。[以下の語釈と『万葉集』の出典は略 “一を飼う”])の肯定的な記述対し、②(「ひそかに人の隠し事を嗅ぎつけて告げる者。まわしもの。問者」[『浄瑠璃、ひらかな盛衰記』の用例は略)、④(「ある語に関して、似て非なるもの、劣るものの意を表す語。また、卑しめ軽んじて、くだらないもの、むだなものの意を表す語。“一桜” [旧版は “一蓼”] “一死” “一侍”)は、否定的な語義や侮蔑的な語感が強く出る。

成句10項中の【一に論語】(「道理を説き聞かせても益のないことのたとえ。牛に経文)は、【牛に経文】【馬の耳に念仏】【兎に祭文】と一緒に犬を牛・馬・兎並みに見下す。因みに、【牛に対して琴を弾ず】(「楚庭事苑」[魯^ろ国の公明儀が牛の前で高尚な趣の曲を琴で弾じたが、牛は素知らぬ顔で草を食べ続けていたという故事から]高尚なことを言っても志の低い者には理解されない)は、『現漢』の【対牛弹琴】(「道理の分らない人に道理を説き、素人に玄人の話を聞かせる事の比喩。今は話す人が対象を見たい事を嘲笑するのにも用いる)と意味・用法が少し違う。

【一の遠吠え】(「臆病な者が陰で虚勢を張り、または他人を攻撃することのたとえ)は犬の卑怯を貶め、【一は三日飼えば三年恩を忘れぬ】(「犬でさえ飼われた恩を忘れない、人間はなおさら恩を忘れてはいけない)は、唯一の褒め言葉ながら人間以下の前提に立つ。【一骨折って鷹の餌食になる】(「鷹狩りで、犬が骨を折って追い出した獲物を鷹に取られる。苦勞して得た物を他人に奪われることをいう)、【一も朋輩鷹も朋輩】(「同じ主を持てば、身分に差別はあっても朋輩は朋輩であることのたとえ)は、同じ狩猟用「飛(ぶ)禽走(る)獸」の代表の鷹に対する劣位を示す。

『広辞苑』の【鷹】①の贅辞(「小形の鳥獸などを襲って食う」と「また鷹狩に使った」の間の「姿に威厳があり、古来尊重され)は、【一富士二鷹三茄子】(「縁起の良い夢を順に並べていう語。特に、新年の初夢にこれを見ると縁起が良いとしていう。駿河の国の諺で、一説に駿河の名物を言うという)にも感じられる。中国では懐妊中の夢に龍を見ると立派な子が生れる等の言い伝えが有るが、新年の初夢への拘りも靈峰や鷹の出現の有難みも無く、況して「常見蔬菜」(「可く有る野菜。『現漢』の【茄子】の表現)が尊ばれる訳は分り辛い。

三大縁起物の由来として駿河国(現静岡県中部)の貴重な物(富士山・愛鷹山・初物の茄子)、

徳川家康(江戸幕府を開いた徳川初代将軍)が好んだ物(富士山・鷹狩り・初物の茄子)等の説がある。「富士=不死」「鷹=高い」「茄子=成す」の語呂合せの縁起担ぎは有力ながら外国人には伝わり難いが、中国の言葉遊びで登場する茄子は写真撮影の掛け声「一、二、三、茄イー アール サン チェー ス~子(qié~zi)」である。日本流の「はい、チーズ」と似て母音iの口を左右に引く形で笑顔を作る中国流は、一の「富士」(Fùshì)、二の「鷹」(yīng)の中国語読みに適用するから微笑ましい。

『現漢』の【鷹】は「猛禽」等の記述に止まるが、【鷹隼】(鷹と隼。共に小形の獣及び他の鳥類を捕食し、転じて狂[原文=“凶”]猛或いは勇猛な人に譬える)、【雄鷹】(雄健・勇猛な鷹。“勇猛な鷹が羽搏く”[比喩的に]閱兵を受ける「雄鷹」編隊の8機が広場の上空を飛び通った)、【戦鷹】(「作戦の飛行機を指す[好きな意を含む]。’見ると4機の‘戦鷹’が真っ直ぐ空の高みへ猛進する”)に、姿の威厳に現れる威力への畏敬が窺える。一方の【鷹鼻鶴眼】(「悪賢くて凶悪・残忍な人の相貌の形容」)は、【鷹鉤鼻】(鷹/鉤鼻)や【鶴】の様な眼に対する容姿差別も構わない嫌悪を表す。

【鷹】の5項中【鷹鼻鶴眼】【鷹派】の次の【鷹犬】(「狩猟用の鷹と犬。人に駆使され手先と為る者の比喩」)は、同じ負の意味で日本語にも入った(『日国』=「[鷹]鷹[たか]と犬。ともに狩猟に用いる。②他人に使役されること。他人の手先となって働くこと。また、そのもの」, 初出=「令義解[718]」「太平記[14C後]」, 漢典=「宋史-楊業伝」「宋史-唐垌伝」)。日本での死語化(『広辞苑』未収)と対照的な健在は転義の人種の多さを思わせるが、中国では日本の熟語に見る鷹高犬低の序列と関係無く鷹は走狗に並び、十二支中の鼠に次ぐ悪役の犬と良からぬ一對とされる。

【狗】は客観的な説明(「嗅覚と聴覚がとても鋭敏」,「人類が最も早く馴らした家畜」「訓練で警察犬に成れるのも有り、狩猟・牧羊等の補助に用いるのも有る」等)に徹するが、20項中5項に「人を罵る言葉」,1項に「嘲笑の意を含む」の説明が付き、他の14項も好評が有るのは【狗宝】(犬の胃・胆嚢・腎臓・膀胱の中の結石、薬用可)、【狗糞】(穴熊。脂肪錬成の油は火傷薬)しか無い。【狗尾草】(犬科の1年草の狗尾草)も別称「莠」の項で、用例付きの悪評が記される(「①狗尾草。②<書>質が悪い物の比喩。“玉石混淆”[原文の“良莠不齊”は善人と悪人が混じっている意も有る]」)。

「(罵人的話)」と付記した項には、走狗・鷹犬と類義の口語【狗腿子】(「犬の足」手先。語積=「勢力の有る悪人の為に奔走し、悪事を手伝う者を指す」)の他、4字熟語の【狗胆包天】(「天を包む様な犬の胆」大胆不遜[“大胆不敵”に擬えた造語]。同=「人が憚らず出鱈目な事をするのを指す」)、【狗仗人勢】(犬が人の威勢を借りる。「他者の勢力に頼って人を虐める事を指す」)、俗語の【狗屎堆】(犬の糞の山。「人に嫌悪・痛恨させる者の比喩」)、【狗屁】(「犬の屁」出鱈目。「取る可き処が皆無の語或いは文章等を指す」,例=「全然成っていない」「下らない文章」「何が新製品だ。出鱈目だ!」)が有る。

「(含嘲笑意)」の【狗吃屎】(「ぼったり腹這いになって転ぶ」)は犬が糞を食らう姿に擬し、『西遊記』第32回に古い例が有る諧謔語は、用例「摔了個~」(つんのめて了った)に常用度が窺えるが、汚穢な譬えを憚る外国語訳(一部の『西遊記』和訳等)では糊塗や抹消も見られる。中国は主体民族(人口の9割超)の漢族と歴史が悠久な国語の漢語の他、55の少数民族と一

部（含絶滅危惧種）の少数民族語が有る。『現漢』は外国/少数民族語に対する中国/漢語の有り形を展示し、十二支関連の表現は善悪・美醜・吉凶を巡る価値判断が見処である。

「不実な美女か貞淑な醜女か」——融通無碍と愚直一徹——「露悪」と露骨な罵倒・侮蔑——美化と「醜化」——美醜・真偽・虚実・善悪

『井上ひさしの日本語相談』の上梓の前年（1994）、義姉（夫人の実姉）米原万里（露西亜語同時通訳者・作家、2006年病没 [56歳] 時は日本ペンクラブ [会長=井上] の常務理事）は、『不実な美女か貞淑な醜女か』で第46回読売文学賞随筆・紀行賞に輝いた。異言語に訳す作業で原文への忠実さを追求すると生硬に為り易く、自然な表現に直せば原文との乖離が生じる、という進退両難（一種の“To be or not to be, this is the question.”）は、融通無碍な意識 vs. 愚直一徹な直訳の2択を指す軽妙な題名と豊富な体験談で存分に表された。

容姿差別の誹りを恐れず「美女・醜女」を並置した洒脱は、駄洒落と性に関する下品な話題を好む痛快な天性の発露である。本著では知/痴的な「お下品」の露出や自ら「恥部」を曝け出す「露悪」よりも、この和製漢語の字面と重なる露西亜語の質の悪い罵倒語の大進行為脳天を直撃する。大韓航空機撃墜事件（1983.9.1）でソ連軍偵察機の操縦士同士の交信に満ちた罵り合いが、問投詞の如く「糞/ちんぽこ」系の単語を不断に散り散らめる露西亜流の会話の例と為り、口汚くも限り無く豊かな罵詈雑言が親密表現に貢献する機能も見出された。

彼女は「ソビエト文学の父」ゴリキー（『広辞苑』不立項）の「世界に類を見ない罵り言葉の宝庫」説に、母語しか知らぬ彼は約1500~3千の言語が有る世界に無類だと断じ得るのかと疑問視しつつ、露西亜の小説等に登場する数々の悪罵・愚弄は8割が和訳し難い状況から説得力も感じる。日本人なら精々「そうかなあ」で同意しかねる旨を伝える処を、露西亜人なら10倍20倍の罵り貶し言葉を口走る、又、腹芸や思い遣りが背景に有る日本語に対して英語は攻撃的・過激である、という内外の識者の観点を「罵り言葉考」で援引した。

露・英語の「雌犬」（相手構わず身を任せる淫乱な女）、「雌犬の息子」（父無し子 [父親不明の私生児]）は比較的品の良い罵倒語で、伊太利や西班牙では「売女」「売女の息子」の方が人口に膾炙しているという比較から、西班牙語の慣用句「走る女」（姦りたくて仕方無い女）もこの範疇に分類されると記す。西班牙では「お前の母親」と言っただけで相手は蜂谷の青筋がぶち切れる程に怒り狂い、露西亜語には母親中傷路線上に「お前の母親を姦った」が有り、これに較べると日本語の「お前の母ちゃん出臍」は実に無邪気で他愛も無い、と述べた。

年輩の日本人が中国で世話に為り親しみを感じた現地の青年に、感謝と親愛を込めて「君は私の息子だ」と言った処、相手は立ち処に怒りの余り顔面蒼白になり席を蹴った、という実話に就いて、流石中国4千年の歴史、「お前の母を姦った」という如何にも下品で直截的な

物言いが、こんな迂遠な言い方によって行くのだ、これこそ文化ではないかと知った時に、米原は震えが止らない様な感動の波に包まれた。翻って「お前の母の出臍」も同義の変種で、語り尽す事を無粋とする日本文化の余韻尊重の特徴を見事に映し出している、と言う。

2006年^{サッカー・ワールド・カップ}蹴球世界杯の決勝戦(7.9, 伯林^{ベルリン})の瀬戸際(延長戦後半, 1-1)で、^{チェーム}仏蘭西選手団の引退間際のジダン(アルジェリア移民2世)が有終の美を飾れず、伊太利のマテラツツイへの頭突きで退場させられた。相手に^{ユニフォーム}運動服を掴まれ「俺の運動服は後であげるから」と諭した処、「運動服よりお前の姉ちゃんが欲しいな」と挑発された為、侮辱に耐え切れず司令塔の重責を^{なげう}擲って暴挙に及んだ。能く使われる罵り言葉(白状した一説は「お前の姉貴より娼婦の方が^ま益した」)を発しただけだ、と語る相手の弁明は伊太利語の卑猥表現の酷さを示した。

中国でも「打是親, 罵是愛」(打くは親しみ, 罵るは愛)と言う様に罵りは愛情表現に入るが、真の悪罵は日本語に対する異次元の上で互換性の高い西洋語を量・質とも超える。母親凌辱型の変種の姉妹侵犯型は処女性重視の発想が中国にも有るが、中国流痛罵の「性侵犯」対象は「祖宗十八代」(18代前までの先祖)に及び男性も免れない。「尙你媽」(お前の母ちゃん^{フアツツ}を姦る)は露西亜語と違って完了形ならぬ挑戦状であり、「尙」(『現漢』=「^{フアツツ}人を罵るのに使う下品な言葉。男性の性交の動作を指す)は、肉体への挿入を字面に現す露骨な肉欲・悪趣味が目障る。

「雌犬」「売女」に当る中国語は「母狗」「婊子」(「妓女[多く人を罵るのに用いる語]」)で、「狗娘/婊子養的」(雌犬[「娘」=母]/売女が生み育てた奴)は息子・娘の両方^{さげす}を蔑む。「国罵」(国の代表的な罵り言葉)の「他媽的」(尙他媽的屎[彼[誰か]の母のまんこを犯す]の略)は、英語の^{くだり}件の4文字(『広辞苑』の「ファック【fuck】」[性交の意の俗語]より無差別「性侵犯」の悪意が強い。中国語は古来この様な汚い部分を多く内包し、人々は痰を吐く習慣の如く気軽に口から出すから、「精神文明」の構築で言語の浄化・美化が切実に求められて来ている。

「美化」(『広辞苑』=「①美しく変化させること、また、すること。“都市の一”②実物以上に美しく表現すること。『日国』=「①美しくすること。②実際以上に美しいと認識したり表現したりすること。美しいものとして見ること。③りっぱに教化すること」, ①②の初出=「永すぎた春[1956]〈三島由紀夫〉」「草枕[1906]〈夏目漱石〉」, ③の漢典=「梁簡文帝-南郊頌序)は、転義が中国に逆輸出され(『現漢』=「^{キャンパス}^{キャンパス} 裝飾や体裁を付けて美しくし、或いは立派にする。“校庭を美化する”“都市の外観[原文=「市容」を美化する]」), 逆に美の教化の意(『漢大』の初出=『詩経・周南・漢廣序)は中国で廃れた。

和製漢語「美化語」(『広辞苑』=「敬語の一種。“お菓子”“あげる”など、表現をより上品にする働きをもつ語。聞き手に対する敬意を表す尊敬語・謙讓語とは機能が異なる。『日国』=「敬語の一種。丁寧語のなかで、“お菓子”“お米”“おいしい”など、話題となる事物・状態そのものを美化して、言葉遣いを上品にするものをいう)は、「五講四美」中の「語言美」(言葉を美しくする)も主旨が似ているが、中国語には上品な言葉遣いや「虚飾語」(造語)が少なからず有るものの、「美化語」の名称や1語の対応が無く、逆に日本語と対照的に「醜化語」(造語)の肥大が目余る。

「醜化」(『現漢』 = 「**勳**本来醜くない物事を醜くする、或いは醜い様に形容する。“実生活を醜くする”“人物の形象は醜くされた”)は、『漢大』の未収から毛沢東時代の所産かと推測される。「もはや“戦後”ではない」宣言(経済企画庁『昭和31年度年次経済報告』,1956.7.19)から間も無く、三島由紀夫(小説家・劇作家)の上記長篇の連載(『婦人倶楽部』1~12月号の第11回『November』[11月])に、「美化」の新しい用法が現れた(「美しい身なりをして、美しい顔で町を歩くことは、一種の都市美化運動だ」)が、社会運動が頻発する現代中国と違って「醜化」は日本で生れない。

「美醜」(『広辞苑』 = 「①うつくしいこととみにくいこと。よい事物とわるい事物。②容姿のよいこととわるいこと。また、うつくしい人とみにくい人」)は、美しい身^{なり}・顔→都市の美化と通じて外見/具象→内面/抽象の順で両義が生じた(『日国』の「**国**物や事柄のうつくしいこと。みにくいこと。また、すぐれていることと、劣っていること。②容姿のうつくしいことと、みにくいこと。また、美人と不美人」は、②の初出「随筆・松屋筆記 [1818-45頃] 六七“好男は形貌(かたち)の美醜にはよらず[下略]”が、**国**の「小説神髓 [1885-86]〈坪内逍遙〉上“善悪美醜の弁別(わきまえ)[下略]”より早い)。

『現漢』には『漢大』未収のこの和製漢語も「善悪」も無いが、【真偽】は載録されている(「**真** [の]と偽り [の]。“真偽を弁別し得ない”)。日本語(「まことといつわり。論理的な正誤。“一の程は定かでない”/「ほんとうのことといつわりのこと。ほんものにとせもの」)は、漢典(「漢書-宣帝紀“使**真**偽母**相**乱-”)に拠り、初出(「経国集 [827] 二〇・白猪広成対策文“必須**考**其**真**偽**察**其**虚**実-”)で「考・察」「真偽・虚実」の対が出たが、『現漢』の【虚実】(「虚と実。広く実際の状況と内部の状況。“実情を探る”“実情は測り知れない”“実情が分らない”)は日本語と異なる。

日本の両辞書の【虚実】(「①無いことと有ること。空虚と充実。②うそとまこと。“一相半ばする”③防備の有無。種々の策略を用いること。“一を尽くして戦う”④漢方で、虚証と実証)/「**国**実質のないこととあること。空虚と充実。②うそとまこと。また、虚偽か真実かということ。こじつ。③漢方医学の用語で、不足と過分の意。体の機能や症状が衰弱していることと、異常に亢進していること」[4略]、初出 = 「権記-長保三年 [1001]」「正倉院文書-宝亀三年 [772]」「全九集 [1566頃]」、**国**の漢典 = 「後漢書-孝安帝本紀」)に無いが、中国独特の語義は「外見 = 虚」「内情 = 実」の認識に基づく。

『漢大』の【虚実】の多義(「①虚或いは実。虚と実。②真偽。③内部の実際の状況」)は、何れも古い用例が有る(初出 = 『韓非子・安危』『後漢書・度尚伝』『後漢書・朱俊伝』)。『日国』の②に欠けた漢典と同じ史書に出た③は②の真偽と関連しながら日本語に入らず、逆に『広辞苑』の②④は中国人好みの防備・策略と漢方の内容なのに日本語に止まった。①②の初出(「安危在是非、不在於強弱。存亡在虚實、不在於衆寡。」「夫事有虚実、法有是非。」)は、「安危・是非・強弱・存亡・虚実・衆寡」と「在~/不在於~」(~に在り/~に在らず)に對の発想の強さを窺わせる。

日本語の「善悪」(「古くはゼンナク・ゼンマクとも」)曰『名』善と悪。善人と悪人。“一をはっきりさせる”曰『副』よいにせよわるいにせよ。是非とも」/「**国**『名』よいこととわるいこと。よしあし。邪正。また、善人と悪人。②『副』よかれあしかれ。とにもかくにも。どうあろうとも。ぜひととも」)は、

漢典(「史記-夏本紀」)由来の①の初出(「十七箇条憲法[604]」)で下の「成敗」と連用し、②(初出=「金刀比羅本保元[1220頃か]」)は中国語の「好歹」(良し悪し)の副詞用法と通じる。『現漢』では【好歹】の4義(他に「危険[特に生命の危険]」「適当に」)が出るが、「善悪」は除外された。

「真善美(聖)」対「假悪醜(俗)」——「普世価値」対「定於一尊」——「遺臭万年」対「流芳百世」——「焚書坑儒」と「七不講」

真偽・善悪・美醜の良い方の合成「真善美」(「認識上の真と、倫理上の善と、美学上の美。人間の理想として目ざすべき普遍妥当な価値をいう。これに完全性として聖を加えることもある」/「認識上の真と、倫理上の善と、審美上の美。理想を実現した最高の状態をいう。この三つは、それぞれ論理学・倫理学・美学という独立の学の主題であるとみられる場合もあるし、また、価値論で、相互に関連し合った統一的な価値とみられることもある」、初出「みだれ髪[1901]〈与謝野晶子〉はたち妻“かくてなほあくがれますか真善美わが手の花はくれなるよ君”」は『広辞苑』の出典も、『現漢』には入っていない。

『広辞苑』は第2版(1969)で各約2万項目の削除・追加を行い、初版に多く収録された中国の漢文語や国史の古典語等を整理した改編は、同版補訂版(78)を経て第3~7版(83, 91, 98, 2008, 18)と重ねた。平均9年弱に1回の改版では語釈の変更(例えば現行版の【真善美】の「完全性として」の加筆)をする一方、第2版の1回限り的大幅な差し替えの後は既成項目を原則的に削除せず、収録項目は初版から20万超→増減相殺で略同じ→数百増→1.2万増→22万余→23万余→24万余→約25万へと漸次増えて来た。

『現漢』は「試印本」(意見募集用, 1960)と「試用本」(出版申請審査用, 65)が小範囲に出た後、「文革」中の文化事業の停滞で本格的な修訂が進まず78年に漸く初版が刊行された。改訂(1983・96・2002・05・12・16年に第2~7版[第3・4は「修訂版」名義])は、3~7年(平均6年弱)の周期で行われて来た。採録項目は5.6万→微修正のみ→6万余→1200余増→2千余削除・4千余増→3千弱増(総数6万9千余)→約400増と為った。現行版の改訂の短い期間と微増幅(0.6%)は過去版と比べて突出し、『広辞苑』の同じ第7版に照らせば異様である。

第5版を除いて全て党大会開催(末尾が2・7と為る年)の前後に出された事は、江沢民・胡錦涛の党首(総書記)任期満了(2002, 12)時が典型である様に政治的な季節性を現す。編集集団が所属する中国社会科学院は文系の国家学^{アカデミー}士院と政権の「智库」^{シンクタンク}(^{頭脳}集団)で、編集方針は自ずと当局の意向に沿い、自由主義体制から権力への迎合と見られて仕方が無い。習近平治下の現行版は再任を決める党大会の前年に発行され、初当選の直前に完成した旧版に対する増減は微量ながら、「学“習”」(習[近平思想]を学ぶ)の指向性が透けて見える。

毛沢東張りの集権統治で打ち出された合言葉の採録に、【定於一尊】(「思想・学術・道徳等が1人の最高権威者を唯一の基準とする事を指す[『史記・秦始皇本紀』]に拠る語)、【妄議】(「^誦妄り

に議論する。“物を言うには根拠が要り、妄りに議論しては行けない”)が有る。「一尊に定まる」は秦の始皇帝的な独裁への反省で党規約が禁じる個人崇拜の匂いもし、「妄議」(『漢大』未収)を言論封殺の罪名(「～大政」等)とするのも逆戻りと言える。改革・開放は「実践が真理を検証する唯一の基準」説で導かれたが、今や時代錯誤の流行語が『現漢』に大挙に流れ込んだ。

「定於一尊」の祖形(「今皇帝并有天下, 別黑白而定一尊」[今皇帝は天下を併せ有ち, 黑白を別ちて一尊を定む])は、秦の始皇帝へ上奏する丞相李斯の焚書の建議に在る。焚書(『広辞苑』=「書籍を焼きすてること。学問・言論を圧迫する手段として行われた」)の結果が、焚書坑儒(同=「前二一三年, 秦の始皇帝が民間に蔵する医薬・卜筮・農業などの実用書以外の書をすべて集めて焼き捨て, 数百人の儒者を捕らえて, 翌年咸陽で坑に埋めて殺したこと」。「焚書」未収の『現漢』=「秦の始皇帝が統治を鞏固にする為に古代の典籍を焼き棄て, 方士・儒生を生き埋めにして殺した事を指す」)である。

李斯は「陛下創大業, 建万世之功」(陛下大業を創め, 万世の功を建つ)と君主を称えたが、焚書坑儒は「遺臭万年」(『現漢』=「悪い名声が後世に伝わり, 永遠に人々に唾棄・罵倒される」)に近い。『日国』の【流芳】(「芳名を伝えること。名を後世に残すこと。また, 伝わり残った名声」, 初出「新編覆醬集 [1676]」)の用例2点目(「浮世草子・けいせい伝受紙子 [1710] 一. 三「是皆前世の業因の感ずる所はいひながら, 流芳 [リウハウ] 百世やいはん, 又遺臭万年とやいひつべき」)に出たこの成語は、日本語の超絶の礼賛・侮蔑表現の少なさを現して「流芳」と共に『広辞苑』に無い。

「遺臭万載」(初出=『晉書・桓温伝』『世説新語・尤悔』の「既不能流芳後世, [亦] 不足復遺臭万載邪」)より、後出の「遺臭万年」(同=『宋史・林勳等伝』の「若乃程秘之窃富貴, 梁成大, 李知孝甘为史彌遠鷹犬, 遺臭万年也」)が定着したのは、音律の妙(「遺臭」の第2・4声の平・仄に対し、「万載」の同じ仄の4・3と違って「万年」の4・2の仄・平が2字・2語間の対を成す)も要因と思える。傍証として使用度の低い「～万代/千年」も後半に抑揚の対が無い(4・4/1・2)が、後者は規模が桁違いの「万」を好む中国人に物足りない感じも重なる。

『現漢』の【流芳】(「(書) 勳美名を伝わり遺す」)の用例「～百世 | ~万古」も千年を超え、永久に近い歳月を表す「百世」は100の世代(20~30年)としても優に2~3千年に為る。秦が6国を滅ぼして中国初の中央集権国家を建てたのは改革・開放元年の恰度22世紀前で、始皇帝(紀元前221~前210在位)即位と『現漢』誕生も同じ間隔の「時(間の連)環」で繋がる。彼の中国統一の英名も焚書坑儒の汚名も狭義の百世の後に遺っているが、「定於一尊」の独裁が歿後3番目の新千年紀の初めに言・行両面で復権したのは歴史の逆行である。

従来の否定的な用法(『中国語大辞典』[大東文化大学中国語大辞典編纂室編, 編集主幹=香坂順一, 角川書店, 1994]の【定於】[動]②「[…によって] 定める, 定まる」の2番目の例文[~一尊][成]「最高の権威者を唯一の目標・基準にする。例〈在封建専制的文壇上, 只有他個人的思想、著作被~, 強迫人們去接受〉封建専制の文壇で, 彼一人の考え方や著作だけが最も権威のあるものとされ, 人々にそれを受け入れるよう迫った」等)との反転は、国家権力が国語を振じ込ませた「妄改」(「妄

議」を振って恣意な変更を指す諸語(かいぎやく)と誹られかねない。

微修正に止まった第2版の次に古過ぎる語と専門的過ぎる百科知識の項目が削られ、微増補の第4版に次ぐ第5版の大掃除は古いか使用頻度の低い項目・語義を対象にした。第6版は少量の古い語・義を廃棄し、第7版の少量処分は意味が自明の言葉も含めたが、現行版は「陳旧」(古い。時代遅れ)類消去の既定方針とは裏腹に、個別の「使禁条」(「紫禁城」の日本語読みの語呂合せて使用禁止“詞条[語句の項目]”を表す造語)も、「陳腐」の判定が明らかに当たらない新語なのに、「焚詞」(「焚書坑儒」に因む造語)焼却炉に投げ捨てられた。

『日国』の【掉尾】②の初出(「朱雀日記[1912]〈谷崎潤一郎〉鳳凰堂“即ち此の堂は藤原氏旺盛時代の掉尾の置土産として”)の100年後、2期目(5年)の最終年度を迎える温家宝総理は記者会見(2012.3.14)で「文革」復活の危険を警告した。3ヵ月後の『現漢』第6版で開明治世志向の胡(锦涛)・温時代の掉尾の置土産の様に、【普世】(「満天下。挙世。“世の中の人々が普く喜びに沸く”)に新義②「**汎属性詞**。世界で普遍的に認められている。“普遍的価値”“普遍的倫理”」)が追加されたが、4年後の改訂で第5版新設の項目毎に「砍掉」(切り落す)群に入れられた。

習の全権掌握(党首・中央軍事委員会主席当選[2012.11]後の国家主席就任[13.3])の翌々月、党中央辦公庁(事務総局)通達で大学の講義に於ける「七不講」(7つの「語るな」)が強要された。報道の自由・公民社会・公民の権利・党の歴史上の誤り・権貴資産階級・司法独立の前に「普世価値」が先ず檜柱に上げられた故、「精神汚染排除」の為に多難・短命の【普世】の無難な原義まで遭難した。前政権の軌道からの離脱は国や時代に関らず普遍的な事象であるが、『広辞苑』で「普遍妥当的な価値」とした「真善美」は抑々『現漢』に収まった事が無い。

西洋発・日本伝来の「真善美」は中共の意識形態(イデオロギー)に合わず疎外され、国産の普遍的倫理の「三綱五常」等も旧時の遺物に帰されるが、追放されず否定的な評も付かぬ残留組は許容範囲内に在る。『現漢』は中国独自の普遍的価値・倫理を尋ねる糸口と為り、「善悪・美醜」と対照的な「真偽・虚实」の載録・用例多数から、善・美より真実を求め醜悪より虚偽を嫌う性分が窺える。何しろ「偽装/造大国」では真贋の識別は切実な問題で、第5版から扉の頁は「水印」入りの偽造防止用紙で出来、「(海)盗版」(海賊版)ではないとの断りも刷られる。

日本語は「真善美(聖)」を創出した一方、「偽悪醜(俗)」(中国の対義語=「假[仮]悪醜」)が無い。中国語への先行が多い日本語の「~化」表現(「緑/現代/機械/大衆化」等)の発達を思えば、「美化」に対する「醜化」の不在も掘り下げが要る。日本では清く正しく美しい姿や身の処し方を理想とする半面、醜くない物事を醜くする、又は醜い様に形容する習性が余り無い。犯さず犯されず(中国語=「井水不犯河水」)主義か諸外国の様な中傷合戦も盛んではないし、逆に中国の「醜化」の伝統は人からの攻撃も人への攻撃も多い事象に裏付けられる。

「狗苟蠅營」——「狗尾統貂」——「狗急跳牆」と「窮鼠齧狸/窮鼠猫を噛む」

——「狗嘴吐不出象牙」——「狗血噴頭」——「狗仔隊」

『現漢』の【狗】の悪(い)意(味)の17項は、同形の語句どころか同種の発想も『広辞苑』には皆無である。【狗苟蠅營】(主項目は【蠅營狗苟】 = 「蠅の様にあちこち飛び回り、犬の様に一時の生を貪る[原文 = “苟且偷生”]。人が廉恥を顧みず、何処でも巧く立ち回る事の形容。狗苟蠅營とも言う)は、「狗・苟」(gǒu)の「蠅・營」(yíng)と同様の同音及び同じ「句」を含む字形で憶え易く使い易い。田中貢太郎(作家)の『牡丹燈記』(中国の怪談の短篇翻案物、1931)に「蠅營狗苟」が有ったが、対を成す下の「羊狼狼貪」と共に『日国』でも採録されていない。

『日国』の【狗尾統貂】の冒頭の括弧付きの説明(「“狗尾”は犬のしっぽ。“統貂”は貂[てん]に続くの意。中国、西晋の趙王司馬倫が、帝位を称し、一味の者を高位高官につけた。そのため朝廷には貂蟬[ちょうぜん][=貂の尾や蟬<せみ>の羽を用いた冠飾り物]をつけた高官がむやみに多くなり、その中にはつまらない人間も少なくなかった。そこで当時の人が悪口に“貂不足狗尾統[冠にかざる貂の尾が足りないので、犬のしっぽの冠がそれに続く]”と言ったという『晉書-趙王倫伝]の故事から)の通り、古代四大美人の3番目の名前も出た由来が古く由緒有る4字熟語と言える。

但し語義の解釈(「つまらない者が高官に列すること。劣った者がすぐれた者のあとに続くことのとえ。また、他人のし残した仕事をついで行なうことを卑下していうのにも用いる)は、『現漢』(「好くない物を好い物の後に続けさせ、良し悪しが釣り合わない様に見える比喩[多く文学作品を指す])と一部違う。日本では使用歴の欠落や『広辞苑』の不採録が示する様に馴染が薄いのが、中国語に無い「愛犬/猫家」(『広辞苑』の【愛犬/猫】の「①かわいがっている犬/猫。②犬/猫をかわいがっていること。“一家”」)を見れば、犬に付き纏う不評の比喩が減ったのも納得する。

鼠と猫の対が出る日本の熟語「窮鼠猫を囓む」(『広辞苑』 = 「[塩鉄論“窮鼠狸を齧む”] 追いつめられた鼠は猫にも食いつく。絶体絶命の窮地に追いつめられて必死になれば弱者も強者を破ることがあるたとえ)、 「窮鼠かえって猫を囓む/食む」(『日国』 = 「[追いつめられた鼠が猫にかみつく意] 弱い者でも絶体絶命の立場に追いつめられると往々にして強者に反撃する。必死の覚悟をきめれば、弱者も強者を苦しめる意のとえ)と言う。初出(「太平記[14C後]四“[前略]‘窮鼠[キウソ]却[カハッテ] 囓[ネコヲカミ]、鬪雀人を恐れず’)」)の様に、漢典(『日国』欠落)の狸は猫に変えられた。

『広辞苑』第7版で補筆された漢典「窮鼠齧猫」は『現漢』には無く、代りに【狗急跳牆】(「窮地に追いつめられて形振り構わず行動する比喩)が有る。走り逃げるにも進む可き道が無い中で犬が焦って塀を飛び越えるとは、悪人が追い詰められ切羽詰まった行動に出る意で、「狗=悪」は「窮鼠猫を囓む」の「鼠=弱者」と異なる。「困獸猶鬪」(窮境に陥った獸は猶鬪う。同項 = 「絶望的な境地に陥った人[多く悪い人を指す]は行き詰っても頑強に抵抗する比喩)も、漢典(「春秋左伝宣公十二年/定公四年」の「困獸猶鬪」)も、「獸=野蛮」「獸鬪=悪足掻き」の発想である。

【狗熊】(「①月輪熊[原文=黑熊]。②軟弱・無能の人を称する。“誰が英雄で、誰が意気地無しか、

我々は比べようじゃないか”))は、【熊】²の①(「(方) 恣意^{くじ}氣地が無い。能力が劣っている」)を用いて、名声不良の獣同士の複合で2重の悪い形象を作り出す。【狗頭軍師】(犬の頭の策士。「好んで人に入れ智恵をし、その入れ知恵が何も優れていない人を指す」)は、親分の為に悪智恵を働かす凡庸な軍師の形容にも使われる。犬は鼠と同じく悪さを働き鼠にも劣って頭が悪いという固定観念が深層に有り、霊長を自任する人間の他の高等動物を見下す上から目線も感じる。

【狗嘴吐不出象牙】(犬の口から象牙は出ない。「悪人の口から良い言葉が出ない比喩。狗嘴長不出象牙とも言う」[「長不出」=生えない])は、現存最大の陸棲哺乳動物の稀少価値が高い牙と犬の口との対比で貴賤の両極を表す(『広辞苑』の【象牙】の「飾物・細工物・印材などに珍重。ゾウの乱獲・密猟をもたらし、ワシントン条約により商取引を禁止」は、『絶滅の危惧の有る野生動植物の種の国際取引に関する条約』[1989]の禁止を2018年版で補筆したが、『現漢』の「材質が堅く・白く・肌理細かく、工芸品を作れる」)に続く「現在、世界で已に象牙の貿易を禁止している」は12年前に出た。

【狗血噴頭】(犬の血を頭から浴びせる。「とても激しく罵り、相手の頭に犬の血を浴びせる様な剣幕の形容。狗血淋頭とも言う」)と【狗血淋頭】は、古代「除凶避悪」(凶を除き悪を避ける。厄^と除け)用の狗血で敵視・排斥を形容する。【狗咬狗】(犬が犬を咬む。「悪人の中の軋^{あつれ}・抗争の比喩」)は「犬=性悪」と決め付け、【狗仔隊】(犬ころ連中。「(方) 特種^{スケープ} [多くは私生活情報^{フライバシー}] を獲る為に著名人を尾^つけ廻す記者たちを指す」)も、『広辞苑』の「パパラッチ【paparazzi^{ぱぱらつち}】」(「有名人を執拗に追いかけて回すカメラマン」)や、原語の由来(方言の「藪蚊」が有力)に無い犬で悪名を付ける。

煩^{わづら}い意の「藪蚊」と和語「五月蠅い」の漢字と妙に合うが、漢訳「狗仔隊」は犬の嗅覚敏感と失踪・尾行得意の特徴や、「愚連隊」(和製漢語)とも通じて集団性・無頼性を帯びる。関連の「狗崽/仔子」(犬の子)は「狗娘養的」([犬並みに] 碌でなしのお袋から生れた)と同義の侮辱語で、「狗東西」(こん畜生。「東西」=物)や「狗雜種」([犬の様な] 人でなし)と一緒に、下品過ぎる故か「普世価値」と別の理由で「収(録)禁(止)」(造語)を喰らったが、【兔崽子】(「幼い兔 [多く人を罵る言葉に用いる]」)は「狗～」と共に「兔死狗烹」の両獣並列と通じる。

附記

引用・参考文献は連載の途中か終了時、又は単行本化の際に、纏めて記す予定である。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

“对”的情理 “影”的愉悦 (1)

本文就日语“衣食住”和汉语“衣食住行”的异同,及日、中各惯于列举“三大”和“四大”的习性,指出两国如同吉祥数体现的分别喜好奇数和偶数,由此导出“对”的意识浓淡之别。

阐述中国阴阳哲理的对立统一与五行思想的相生相克间的关连,联系两国文化中对3、5、7的特殊意识,对比日语“七五调”和汉语“四六文”的差异,以《现代汉语词典》、《漢語大辭典》、《広辞苑》、《日本国語大辭典》为依据,确认日本基于中国的“7、5、3”偏爱。

分析与五行相关的带“五”的成语,引出与“四”、“三”的复合及“七”的系列。从“七步诗”牵出“同根相煎”、“生存或毁灭”、“重于泰山,轻于鸿毛”。

由“泰山北斗”、“五岳三山”的圣域,转而注视美禽、瑞鸟、灵兽,再将“兽王”狮、虎与龙、凤相对照,挂连十二生肖并验证日本股市格言所示的12年周期起伏规律。

审视含十二生肖动物的成语,探讨中、日对各类动物形象评价的微妙差异。“兔死狐悲”、“狡兔死,走狗烹;飞鸟尽,良弓藏;敌国破,谋臣灭”和“狡兔三窟”等故事,“一言既出,驷马难追”等格言的中、日共有或一方所持,汉语的丑化表现发达,均富于语言、文化比较的启示。

最后对比“真善美圣”对“假恶丑俗”,“普世价值”对“定于一尊”,“焚书坑儒”与“七不讲”,寻求两国权威性语文辞典对历史、传统和现实、理念的反映及当否。

(夏刚,立命馆大学国际关系学院教授)